

【ワークショップ報告】

マンジュ(満洲)王朝としての大清帝国の国制とその歴史的位置
——八旗制を中心に——

杉山清彦(東京大学教養学部准教授)

(2017年7月14日 於専修大学神田校舎)

司会(前川亨)：今日は、東京大学教養学部の杉山清彦先生をお招きして、法学研究所の今年度第1回の法学ワークショップを開催致します。杉山先生のご専門は東北アジアの制度史とりわけ大清帝国の国制の問題でして、『大清帝国の形成と八旗制』(名古屋大学出版会, 2015年)を上梓され、これにより第5回三島海雲学術賞を受賞しておられます。

日本の満洲研究は、戦前の内藤湖南以来の長い伝統と分厚い成果の蓄積がありますが、その蓄積を踏まえつつも、特にここ20年くらいで、目覚ましい進展を見せている印象があります。一言でいうとユーラシア史の構想ということになりましょうか。それは、東洋史/西洋史という従来の学術の枠組み自体に再検討を迫るものでもあります。杉山先生は現在最先端のこの研究分野を牽引する中心的な研究者の一人でいらっしゃいます。残念ながら専門外の者には、この分野の研究で今どのようなことが議論されているのか、なかなか分からないのですが、今回、杉山先生からその研究成果の一端をお話頂けるということで、大変楽しみにしております。対論者には、長く杉山先生と交流をお持ちで、ご自身もユーラシア史に造詣の深い加藤雄三所員にお願いしました。

それでは杉山先生、よろしくお願い致します。

ただ今ご紹介にあずかりました、杉山でございます。このような機会を与えていただきましたことに感謝申し上げます。私は、学生時代からほぼ20年余り、清の歴史、とりわけ入関前——1644年に北京に入る前を入関前といいます——の清の国家形成期を研究しております。大学・大学院ではずっと大阪大学で学び、その後駒澤大学を経て、この6年余りは東京大学教養学部(大学院総合文化研究科)に奉職しております。時間もありませんので、早速本題に入ります。

はじめに

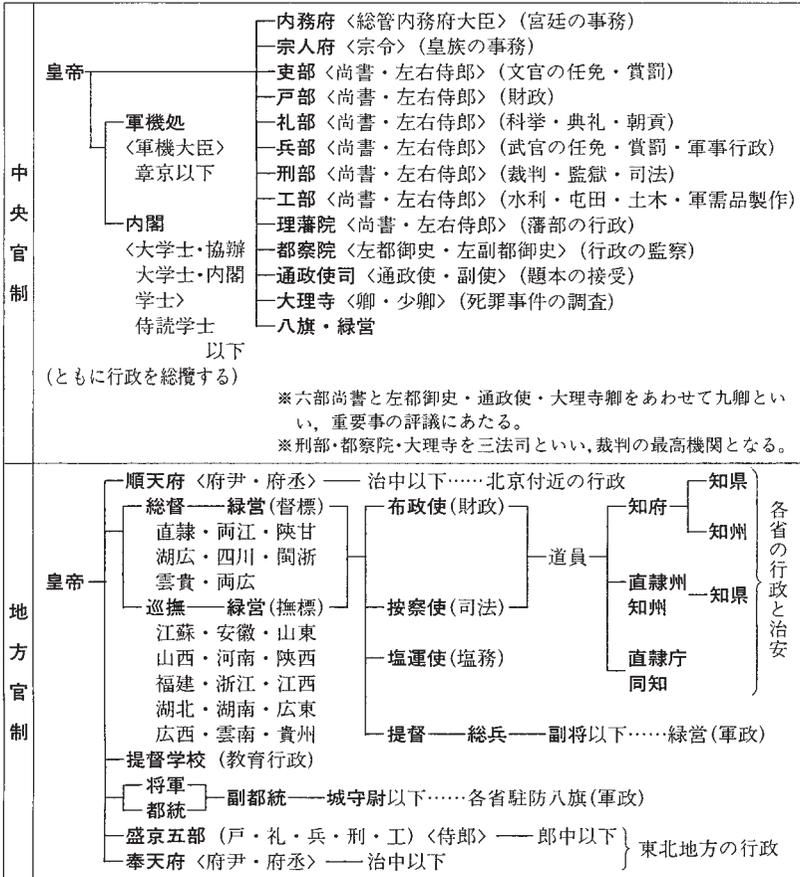
論題を「マンジュ（満洲）王朝としての大清帝国の国制」と掲げましたように、私は、マンジュ（満洲）人が建設した国家としての側面から見ると清はどのような国家として描けるか、ということを経極の目標として、さまざまな点について個別の研究をしております。その際には、世界史において有名な、八旗制度についての研究が中心となります。

正式国号を「大清国」と名乗ったこの国家は、一般には「清朝」と呼ばれ、中国の一王朝として扱われます。ややキャッチーな呼称として「大清帝国」という言い方がなされることもありました。基本的にはやはり「清朝」で、その歴史は、中国史の中の近世・近代史として、殷—周—秦—漢から始まって宋—元—明—清、そして民国・人民共和国へとつながる歴代王朝の中の最後の王朝と位置づけられます。一般にはもちろんのこと、研究者の間でも、たいていはそのように理解されているとよいでしょう。

一方で、その起源が漢人（漢民族）によるものではないということも広く知られています。そのことをふまえて、ふつう清の歴史は、太祖ヌルハチ（Nurhaci 努爾哈齊）が1616年に建設した後金こうきんが原形となり、1636年に清と国号を改め、さらに1644年に北京に入って中国王朝となり、やがて1912年の滅亡に至る——という流れで説明されます。すなわち、当初まず明に対抗する女真人の“異民族王朝”として出現した。しかし、北京に入った後は自らが中華王朝となって、康熙・雍正・乾隆の“中華帝国の繁栄”を導いた。ところが、19世紀になって旗色が悪くなってくると、外国に対する文脈では、満も漢もなく「落日の中華帝国」「中華帝国の危機」といわれ、他方、国内では「滅満興漢」というスローガンに示されるように、再び「あれは中華ではない、異民族王朝だ」という見方が復活する、というわけです。つまり清朝は、前近代においては、最初は異民族王朝とみなされたのに、途中からは正反対に中華帝国になったとされ、しかも近代に入ると、外からは全体として中華帝国と括られる一方、内部では異民族王朝として打倒の対象にされて姿を消す、という語り口で説明されているのです。私どもの立場からすると、非常に恣意的であるように思われるのですが、一般にはそのように理解されているとよいでしょう。

制度面についても同様で、清は明の制度をそのまま継承したとされ、最近ではあま

資料①



り言われなくなりましたが、しばしば「北方の素朴な異民族が高度に発達した中華の制度を受け継いだのだ」という説明すらなされてきました。資料①として『世界歴史大系 中国史4』（山川出版社、1999年、376頁）に載っている官制図を掲げておきましたが、同種の図は、他にも「世界の歴史」や「中国の歴史」、さらには高等学校の教科書・資料集の類に至るまで、だいたい載っています。これらで中央官制を確認してみると、皇帝の下に内閣や六部が同列で並び、あるいは軍機処や内閣は皇帝のスタッフとしてぶら下がっていて、その軍事部門として一番下に「八旗」というのがちょこっと付いている——だいたいこういうもので、また地方官制についても、皇帝がズラリと並ぶ多様な地方官庁を統べるという、同じイメージです。つまり、内閣と六部が政府の中心にあり、人材は科挙によって登用される。しかし、異民族王朝なので独自の制度として八旗や理藩院・内務府・軍機処がおまけとして付け足されており、これらのおま

けを取り除けば、官制は基本的に明と同じである——こういう見方で語られることが、現在なお主流であると思います。

これに対して、満洲史(満族史)の立場からは、この国家は当初は満洲人の国家、八旗の連邦というべきものであり、それが1636年に満・蒙・漢の連合国家になり、入関後に君主独裁制が完成した、というストーリーで語られてきました。これは、中国清代史とは文脈が違いますが、最終的には、やはり同じような説明として合流してしまいます。しかも、では最初の段階、つまり「満洲人の国家」という部分がきちんと説明されているかという点、私はまだ全然なされていないと考えています。そこで、八旗を根幹として組み立てられていたとされる建国当初の国家がどのようなものであったかを、まずしっかりと見なければならぬ、というのが私の立場です。

その際、「大清帝国」といういささか大仰な言い方をしているのは、中華王朝「清朝」として、つまり、中国史という縦軸の中での○朝の一つとして、宋朝—元朝—明朝に続くものと捉えるのではなく、同時代的な観点から、オスマン帝国・ムガル帝国・ロシア帝国といったユーラシア世界の諸帝国と並立する、「大清」と名乗った「帝国」として捉えるためです。もちろん、私は必ず大清帝国と呼ぶべきだと主張しているわけではなく、呼び方にはこだわりませんが、考え方として、そのような文脈で位置づけるべきではないか、と提言しております。その上で、あらためて中華王朝の系譜上に位置づけられる「清朝」という見方で捉えることももちろん必要なのですが、ただ、それだけを本質とみなすのでは、この国家を充分には捉えきれないと考えているのです。

八旗がどのような制度で、それに基づく国制がどのようなものであるかについてはさまざまな議論があるところでして、これからお話しするのは、それについての私見です。近年、天理大学の谷井陽子教授が、「八旗制とは、皇帝の強力なリーダーシップを特徴とする集権体制である」ということを強く主張し、そこには中央ユーラシアの性格はない、という批判をされています(谷井陽子『八旗制度の研究』京都大学学術出版会、2015年)、研究史上の問題や論争の内容に立ち入ると収拾がつかなくなりますので、今回は取り上げないこととし、ここでは、八旗制とそれに基づく国制に関して、私が自分の研究からどのような像を導き出したかについて申し述べるにとどめたいと思います。

1. マンジュ人とマンジュ王朝

まず、「満洲人とはどういう人びとか」というところからお話ししたいと思います。

歴史上「女真人」「女直」あるいは「満洲」などと呼ばれてきた人びとは、少なくとも明清期においては、その原語が分っています。例えば、現在ではモンゴルのことを「蒙古」とは表記しないのは、「蒙古」という漢字表記が「モンゴル mongyol」という語の当て字であることが分っているからです。同様に「女真」「女直」は、少なくとも明清期には「ジュシェン jušen」が原語であることが判明しています。金の時代には発音が違っていたようですが、明清期には確実にジュシェンで、これが1635年に「マンジュ manju」と改められます。それを漢字で写したものが、有名な「満洲」という漢字表記です。このジュシェン、マンジュは、現在でいえば民族名に相当するもので、とりわけマンジュは、もともと王朝名、勢力名、政治集団名であって、それが民族名に転じ、さらに近代以降、だいたい18・19世紀の境ごろに、英語のマンチュリアや日本語の満洲のように地域名に転用されていくようになった、という経緯があります。つまり「マンジュ（満洲）人が住んでいるところだからマンチュリア（満洲）」というわけです。ですので、元来は地名ではなく人間集団の名称だったのです。

彼らの言語はアルタイ系のツングース諸語の一つであるツングース=満洲語で、それをマンジュ文字によって表記しました。マンジュ文字は、モンゴル文字を改良して1600年前後に創成されました。どういうものかと申しますと、資料②がマンジュ文字

資料②

滿洲源流	滿洲原起	於長白山	之東北布	庫哩山下	一泊名布

の例（『満洲実録』巻1）です。この史料の中段は漢文なのですが、この漢文を右から左に向かって読むとすると……読めませんね。それもそのはずで、この漢文は、ふつうと逆に左から右へ読むのです。なぜこうなっているかと申しますと、上段にあるマンジュ文字は、文字は上から下へ書き、行は左から右へ進むので、支配者の文字であるマンジュ文字のこの表記法に合わせて、漢文も左から右へ書くことにしてあるのです。したがって、マンジュ文字の段は一番左上の箇所が全文の始まりということになります。

最初の単語を分解してローマ字に転写していきますと、それぞれ m, a, n, j, u, つまり manju となります。このようにマンジュ文字は表音文字の一種であり、マンジュ文字やその祖型となったモン

ゴル文字、ウイグル文字は、いずれもアルファベットなのです。譬えていえば、英語の筆記体で書いたノートを縦向きに変えたようなもので、ちょうどtimeやwordという語をt, i, m, eやw, o, r, dと分解できるように、一つの語を一連なりに綴り、単語と単語の間は分ち書きにします。その下の語を見ると、g, u, r, u, nというパーツに分解でき、同じように一つのかたまりとして表記するとgurunとなる。これは「国」という意味なので、合わせてmanju gurun, つまり「マンジュ国」ということになります。

さらに、漢文の「満洲源流」の下に書いてあるモンゴル文字の段の冒頭を見てみますと、上段のマンジュ文字とそっくりな文字が書いてありますね。間違い探しのようで恐縮ですが(笑)、よく見ると、ほとんど同じmanjuという文字が欄内の左上に記されているのがお分りでしょう。唯一の違いはuの部分の文字に圈点がないことです。マンジュ文字がモンゴル文字を改良したといわれるのは、このような点を指します。例えば日本語でも、近代以降の正書法で、「ハ」と「パ」と「バ」を書き分けたり、「ツ」と「ッ」を書き分けたりするようになりましたね。モンゴル文字の正書法ではoとuの区別がないので、これだけではmanjuなのかmanjoなのか見分けられません。しかし、ここに圈点を打つことで、マンジュ文字ではoではなくuなのだということがはっきり分るのです。ところが、モンゴル文字の二つ目の単語はマンジュ文字と全く形が違ってきます。冒頭の語であるmanjuというのは固有名詞であって、日本語でいえばカタカナで書いているようなものですから、モンゴル文字で書いてもマンジュ文字で書いても、圈点があるかないかの違いしかありません。しかし、二番目の単語は「国」という普通名詞ですので、フランス語でÉtatになったりドイツ語でStaatになったりするのと同じように、モンゴル語とマンジュ語では単語が違ってきます。ここにいていえば、マンジュ文字で「マンジュ=グルンmanju gurun」と書いてあるところが、モンゴル文字では「マンジュ=ウルスmanju ulus」と書いてあるのです。モンゴルのウルスについては、杉山正明氏の著書で有名ですね(杉山正明『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、2004年)。つまり、モンゴル語のウルスに対応するのがマンジュ語のグルンなのです。そして、上段のマンジュ語、下段のモンゴル語に対応するのが中段の漢文で、そこには「満洲源流」と書いてあります。これは、満文の「マンジュ^{グルン}国の源manju gurun i da」を漢文に翻訳したものです。

マンジュ語の文法は日本語とほぼ同じで、名詞には前置詞ではなく後置詞、つまり格助詞が付き、また動詞は格変化をせずに助動詞が付いて「行く」「行った」「行こう」「行けば」などと変化します。言語学的に厳密に言えば問題がありますが、歴史研究を

する上では、日本語の文法とほぼ同じと理解しても差し支えないでしょう。他方、文字についていえば、12～13世紀の金の時代の女真文字は、漢字をベースにした文字として世界史の教科書にも出てきますが、それに対してこのマンジュ文字はモンゴル文字を借用・改良したものです。このことは、ジュシェン人はモンゴル時代以来、モンゴルの非常に強い政治的・文化的影響下に入っており、元明交替以降もそれは変らなかったということを示しています。つまりマンジュ（ジュシェン）人は、明の周辺の雑多な異民族の一つではなく、明代の間もずっと一貫してモンゴルのいわば「子分」の集団として、その一翼をなし続けたのです。

資料③



生業面では、彼らは農耕・牧畜を主としていました。資料③をご覧ください。これは加藤先生編集の本に載せてもらった明末の絵図ですが（杉山清彦「清代マンジュ（満洲）人の「家」と国家——辞令書と系図が語る秩序」加藤雄三=大西秀之=佐々木史郎編『東アジア内海世界の交流史——周縁地域における社会制度の形成』人文書院、2008年、108頁）、素人目にはモンゴル人と区別がつかない格好をしています。特徴は、有力者は帽子や襟首などの縁に毛皮をあしらっていることです。これは森林の狩猟民としての彼らのステータスで、「モンゴル人は自分たちよりも軍事力が強く、また主筋に当たるけれども、こんなリッチなものは持っていないだろう」（笑）といった、富裕のシンボルなのです。とはいえ、漢人の服装や和服のよ

うに袂を付けたり袴を穿いたりせず、身体にフィットしたズボンにびちっとした筒袖そでの服をまとい、帯をしっかりと締めるというスタイルは、モンゴル人とほぼ同じです。木に引っ掛けたりしにくい小型で扱いやすい短弓を操って、馬上から矢を射かけるという戦法も、モンゴルと変わりません。そのために——これは概説書などでもいまだに間違っていることが非常に多いのですが——、モンゴル人と混同して「遊牧民」と書かれることがありますが、これは全くの誤りです。見た目の姿はよく似ていますが、これは、ともに寒冷な地域に住まっているので、体温を逃がしにくい服装として共通しているだけのことで、遊牧しているわけではなく、マンジュ人は農耕民です。

彼らは日本や韓国の農家と同じような、オンドルを仕掛けた土壁の建物を建て、集

落をつくって、主に畑作農業を営んでいます。もちろん、日本でも山間部で見られるように、農閑期などには山に入って狩猟もするのですが、狩猟によって生計を立てているわけではなく、その狩猟も、主に商業用の毛皮がねらいであって、主たる食糧源を得るためではありません。しかし、例えば人口のほとんどが農家ではなく、また農家のほとんどが兼業農家である現代日本でも、学校・部活・企業・各種団体の組織形態が田植えなど農業の組織をベースにしたものであるように、マンジュ人の場合にも、軍事行動をとったり政治集団・社会組織をつくったりする時には、狩猟の際の組織や行動規範が基礎となります。

このようにマンジュ人は、^{べんぱつ}辮髪や筒袖といったスタイルはモンゴルと共通ですが、毛皮(特に^{クロテン}黒貂が最高級とされます)や淡水真珠といったマンチュリアの特産品を財源かつシンボルにしており、しかも戦闘に際しては騎兵集団を形成するのです。またマンジュ人が北京に入った後すぐに都市生活に慣れていくのも、もともと彼らが集落に住まっていたからなのです。

国号について触れておきましょう。記録が未整備なので、正確には分かりませんが、彼らはある時期からマンジュ=グルンと名乗っていたようです。漢訳は、物騒なことに「満洲国」です。ただ、当初は漢文をほとんど使っていませんから、リアルタイムで「満洲国」と書いた史料はありませんが、先ほどの史料のように、後に「満洲」や「満洲国」と訳されています。漢字国号は当初「後金」と名乗り、後に「金」または^{だいぎん}「大金」と称しましたが、もともと明や朝鮮に対抗するためのものなので、内部ではほとんど使っていなかったようです。面白いのはこの「後金」で、中国の王朝のうち、後漢や北魏などは自らそう称したのではなく、自分たちでは漢や魏などと名乗っているだけだったのですが、多くの日本の高校生などと同じように、ほほえましいことにヌルハチもこれを自称と勘違いしていたようで、当初は自ら「後金」と名乗っていたのです。このことは漢籍に出てきます。ちょっと恥ずかしいということに気がついたのか、すぐに「金」と改めています(笑)。なお、ときどき見かける「アイシン国 aisin gurun」というのは、この「金」をさらにマンジュ語の aisin に訳し直したもので、非常にややこしい関係にあります。

このように1636年までは、ちょうど漢字で「日本」と書いたりカタカナで「ニッポン」と書いたり「ジャパン」と書いたりするような、複雑な状態でした。これをすっきり一本化させたのが^{ダイチン}「大清国 daicing gurun」で、これが清の正式な国号です。私は先ほど「清」ではなく「大清」だと申しましたが、それは彼らが「清」ではなく「大清」の

一語を名乗っているからです。残念ながら語源については明言されていませんが、いずれにせよ、満文でも漢文でも daicing = 大清です。そのため、これは漢字国号だといわれてきたのですが、最近では、そうは断定できないというように考えられています。漢文としての出典が分からないのに対して、モンゴル語に daicing (勇士・英傑の意) という言葉があり、モンゴル人は、daicing ulus という言葉を耳で聞くと「勇ましい国」というように受け取ると考えられるのです。少なくとも、「大清」を単純な漢字国号と断定して、この時期すでに漢化が始まっていたとするような往年の説は行き過ぎであろうと私は理解しています。

ここで、大清帝国の成立に至るまでの流れを整理しておきます。その始まりは1583年で、すなわち日本の天下統一とパラレルな時期に当たります。この年にヌルハチは数えの25歳でジュシェン統一戦を開始します。これを一般にヌルハチの挙兵といいますが、べつに明に対して戦争を吹っかけたということではなく、ジュシェン人の群雄割拠の中に参戦した、というにすぎません。要は、家督を相続して勢力争いの矢面に立ったのがこの年だったということで、よくある豪族の代替りの一例でしかありませんでした。しかし、ヌルハチは大変優れた軍事的才能と政治的指導力をもっていたため、めきめきと力をつけて、わずか数年で自分の出身集団を束ねた上に、他の建州女直・海西女直の諸集団を次々と討ち従えていき、1619年までに全ジュシェン統合を果して、一代で統一を達成しました。これは、ちょうど賤ヶ岳の合戦の年に統一戦を始めて、大坂の陣の翌年に後金を建てたことになり、日本の歴史とパラレルな関係になっています。ヌルハチは1616年に後金を建てたといわれますが、実際にはこの年に後金と名乗ったのではないようです。しかし、いずれにせよこの年にハン位に即き、金が亡びてから400年ぶりに、自らがジュシェンの君主であることを宣言したのです。そして、1618年にいよいよ対明戦争に乗り出していきます。

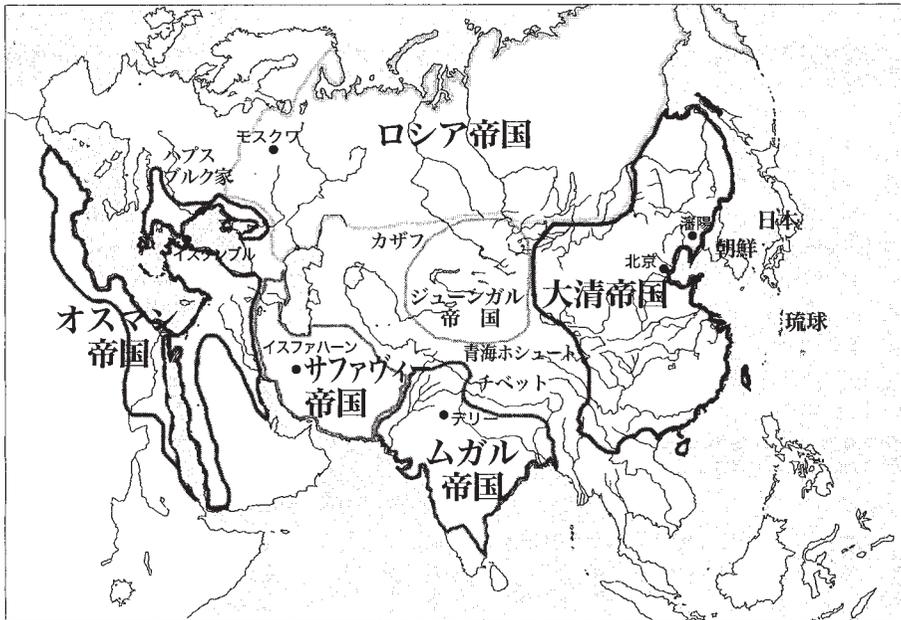
その後、先に述べましたように、ヌルハチの後を継いだホンタイジ (Hong Taiji 皇太極) の代の1636年に国号を大清 = ダイチンと改めます。それとともに、その前年の1635年に、「われわれはジュシェンではない、マンジュである」という勅令を出し、この時からマンジュという名称が国名から人間集団の名前に変わります。これは、世界史的に非常に珍しいことです。そもそも民族名というのは他称であることが多く、しかもその他称がいつ、どうやって名づけられたのか分からないことが多いのに、ここでは支配者自身の勅令によって、「われわれの集団名はマンジュである。これからはマンジュと呼べ」と明言されているのですから。ともあれ、これによって、宋・金の頃か

ら用いられてきた女真という語は消滅し、後に「滅満興漢」などのスローガンでも用いられるように、マンジュ（満洲）に変わったのです。

この一連の改称の契機となったのは、1635年に北元ハーン家の嫡流を降伏させて、「大元伝国の璽」なる印章を入手したことです。いったい中国史の説明では、元明交替によって元朝が消滅したようにいわれますが、実はそうではありません。王朝交替を元→明→清と思っているのは、漢文世界の漢人と、その歴史観を受け容れている韓国・日本とであって、現在でもモンゴル国や南モンゴル（内モンゴル）のモンゴル人は、大元は滅びておらず、1634年まで続いたという歴史観をもっており、明の時代は「南北朝」だと理解しています。つまり、1368年というのは北京を捨ててモンゴル高原に撤退した年であって、モンゴル大元帝国は引き続き健在なのです。北遷後、ハーンが弑逆されるなど混乱はありましたが、ハーン自体は、ちょうど後半期の鎌倉将軍やある時期以降の天皇家と同じように、最高権威者として存続しつづけたのです。ホントイジは、1635年についてこの北元ハーン家を降伏させたのであり、明言こそしていませんが、おそらくこれを以て自らが「大元ハーン」を継承したと言いたかったのだと思われます。そのことが、1635～36年の民族名の改称、国号の変更、ハンから皇帝への第二次即位、といった一連の動きに表れているとみるべきでしょう。この時期、明は健在ですから、これは明の継承ではなく、大元の継承を意識したものと思われるのです。ただ歴史的経過からすると、その後わずか8年で明が李自成の乱によって自滅し、南北に皇帝が並立する状態は長くは続かなかっただけなのです。

この明の内部崩壊によって、漁夫の利を得る形で清が山海関を越えて北京に入り、これを入関といいます。この後、清は明の残存勢力（南明）と、明を滅ぼした李自成勢力との双方を打倒して漢地を手に入れることとなります。いったん1662年に南明を平定しますが、有名な三藩の乱が起り、また台湾に逃れた鄭氏の抵抗は続いていますので、最終的には1683年まで、約40年をかけて南方の漢地の征服を進めました。一方、1680年代には、東北方面でロシア、西北方面でオイラト系のジュンガルとの緊張が高まります。80年代半ばから後半にかけて、清は黒龍江方面でロシアとの対決に乗り出し、1689年のネルチンスク条約で最終的に収まります。ネルチンスク条約で、清はロシアをアムール川流域から駆逐して北方の領域を画定し、ロシアの南下を防ぐことに成功しました。しかし、まさに1689～90年にかけて、今度は、今の新疆^{しんきょう}ウイグル自治区北部を根拠地として中央アジアに勢力を築いていたジュンガルが、モンゴル高原に侵攻してきたのです。

資料④



資料④の地図をご覧ください。これは1700年頃を示すもので、清の勢力がまだ最終的な版図の半分くらいにとどまっている段階です。マンチュリア方面には大きく伸びていますが、モンゴル方面はモンゴル高原の途中で止まっており、中央アジアにジュンガルが帝国を築いています。ジュンガルはその周辺、カザフやチベット方面にも手を伸ばしており、清と充分に張りあう遊牧帝国でした。清とジュンガルはこの後70年にわたって和戦を繰り返します。ジュンガルは最終的に消滅したため忘れられてしまっていますが、1680年代から1750年代まで、清にとって常に最大の安全保障上の脅威であったのはジュンガルで、清の前半期は軍事も外交もこれに対抗することを最大の眼目として組み立てられていました。この清の宿敵ジュンガルは、1740年代、遊牧国家につきもの後継者争いが発生し、それが原因となって、1750年代に内部崩壊を起します。その機を捉えて、清は1755～59年にかけてジュンガル領の併合に成功しました。これが現代中国の巨大な領域の直接の起源になります。つまり、大清帝国の領域形成とは、マンジュ人が原形を築き、モンゴル人と同盟して形づくった王権が、モンゴル系のジュンガル帝国と北アジアの草原の覇者の座を争い、最終的にこのライバルを呑みこむことで達成したものであって、漢人の軍隊や漢人の官僚の手で行なわれたわけではありませんでした。

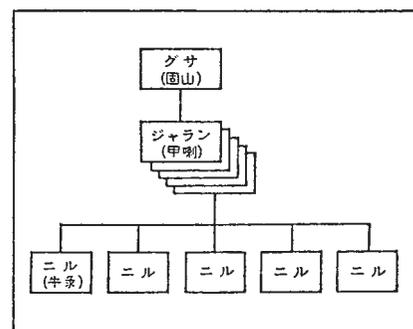
このように、清の前半150年ほどの間に支配領域はどんどん拡大していきましたが、それはいわば偶然の結果にすぎませんでした。マンジュ人に、何かを征服するプログラムや目標があったとはとうてい思えません。対立していた明が勝手に自滅したので、攻めこんだら関内を占領できてしまったとか、反乱が起ったのでそれを鎮圧したら華南まで押えられたとか、あるいはロシアを追い払ったらアムールの北まで行ってしまったとか。ジューンガルとの関係についていえば、草原地帯での軍事的対立というのは危険なもので、情勢次第では一瞬のうちに北京まで敵が進撃することもありますので、対ジューンガル政策を怠らずにいたら、そのジューンガルが自分から倒れたので、そこを保障占領したとか。どれもそのような経緯なのです。いずれも、彼らは必ずしもそこまでやる気はなかったのだけれど、結果として大帝國を築いてしまった。当事者にさえ築くつもりがなかった帝國を引き継いでしまったことが、その後の民国・人民共和國が図体をもてあます原因になっているのではないかと、私は思っております。

2. 大清帝國の支配構造

大清帝國の政治・軍事の中核となったのが八旗です。八旗制度は一般には軍制と理解されており、資料①に掲げておきましたように、六部などと並んで、國家の軍事部門として行政機関や國家諸制度の一つのように説明されます。しかし、その具体的な内実についてはほとんど知られておりません。せいぜい、軍事・行政・政治組織であったと言われる程度で、ではその三つの性格を兼ね備えているというのなら、具体的にどのような組織構成になっているのか、ということになると、整合的な説明はなされていません。

一般によく行なわれている説明は、次のようなものです。すなわち、基本単位はニル (niru 牛录) と呼ばれる組織で、軍隊の基礎単位としてしばしば中隊に擬えられ、英語では company と訳される。このニルが五つ集まってジャラン (jalan 甲喇) という中間組織を構成し、これが連隊に相当する。そしてジャランが五つ集まってグサ (gūsa 固山), すなわち旗を構成し、このグサ = 旗が師団に擬えられる。これを模式化した

資料⑤



のが資料⑤で、これは陸戦史研究普及会編『明と清の決戦』（原書房、1967年、18頁）から採ったものです。そして、このグサ＝旗が八つあることから八旗と呼ばれる——以上がよく見られる説明です。

では、このピラミッド状の組織と皇帝や政府・王族などとはどういう関係にあるのか、ということが問題になります。5個中隊で1個連隊、5個連隊で1個師団、そして8個師団からなる軍隊、というのは、一見すると理解しやすいのですが、よく考えてみると、そのような近代の徴兵制軍隊のような、あるいは俸給で動くサラリーマン的な軍隊が、本当にこの時代にこのような人びとの間にわかに編成できるのか、また、それが国軍の最高司令官としての皇帝の手足となっているのか、といった疑問がただちに出てまいります。先ほど申しましたように、マンジュ国は、戦国時代のような状況であったジュシェン社会に一豪族として登場したヌルハチが、一代で築き上げた国家でした。ヌルハチの立場は、同時代の織田信長や豊臣秀吉のようなものといえます。挙兵当初のヌルハチは、信秀が死んで18歳で家督を継いだ信長とよく似た状況にあり、最初の数年は、まず一族と勢力争いをするところから出発しました。そして、あたかも信長と秀吉を併せたように、一代のうちに天下を統一して自らの政権を創出したのです。そのような状況下で、このように整然とした近代軍隊のようなものができるのか。もしそのようなものをつくったとして、それまで一国一城の主だった領主たちが黙って言うことを聞くのか、忠誠心ややる気は出るのか——そういった問題がいくらかでも考えられるのではないのでしょうか。しかも、八旗が政治組織や社会組織を兼ねているというのは具体的にどういうことなのか、という点についても、全く説明されておりません。

以上のことを念頭において史料を見てみますと、八旗の仕組みについて、実は先ほどのニル<ジャラン<グサのピラミッド型組織とは異なる説明があります。それは、次のような簡素な記述です。すなわち、「国初に八旗を設立し、(a) 鑲^{じょうこう}黄^{せいこう}・正黄^{せいこう}・正白^{せいこう}・正紅^{せいこう}・鑲白^{せいこう}・鑲紅^{せいこう}・正藍^{せいこう}・鑲藍^{せいこう}と名付けた。(b) 八旗は兩翼に分ち、左翼は鑲黄^{せいこう}・正白^{せいこう}・鑲白^{せいこう}・正藍^{せいこう}、右翼は正黄^{せいこう}・正紅^{せいこう}・鑲紅^{せいこう}・鑲藍^{せいこう}とした。また(c) 鑲黄^{せいこう}・正黄^{せいこう}・正白^{せいこう}を上三旗とし、五旗はそれぞれ王^{べい}・貝勒^{いれ}らに統率させた。(d) 各旗はさらに満洲・蒙古・漢軍の三旗に分れ、合せて二十四旗である」(康熙^{かんせい}『大清会典』卷81八旗官制条)。これは、比較的早い時期の康熙年間(1661~1722)に見える記述で、以後清末まで同じように説明されています。(a)の部分には、8つの旗の呼称とその序列が記されています。ここに見える「正」というのはplaneということで、例えば「正黄」とは黄一色の軍旗で、そ

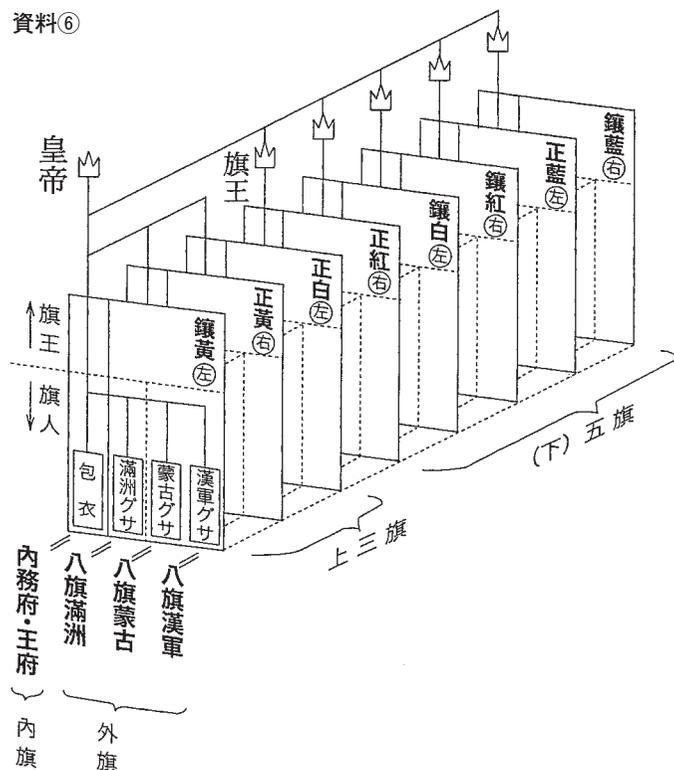
ここに龍の刺繍などが施されています。これに対して例えば「鑲黄」というのは、縁取りのある黄旗ということで、黄色の旗に赤い縁を施したものです。要するに、八旗といっても八色の旗があるわけではなく、黄白紅藍の四色に、それぞれに「縁なし」と「縁あり」とがあり、それらの軍旗によって各軍団を呼称しているのです。

さて、この史料に書かれていることは、先ほどのニル<ジャラン<グサという垂直構造とは全く別です。(b)によれば、八旗は四つずつ右翼と左翼に分れることとなりますが、黄旗が左右に分れる一方で、白旗はいずれも左翼、紅旗はいずれも右翼にあるなど、全然揃っていません。ところが、これまでの書物では、この左右翼が何なのかについては、まったく説明されていません。また(c)では、左右翼にまたがって、鑲黄・正黄・正白を「上三旗」と呼び、それ以外の五旗はそれぞれ王やバイレ (beile 貝勒) が率いている、と言っていますが、では皇帝と諸王の関係はどのようになっているのか、この三旗・五旗の区分と左右翼との関係はどうなっているのか、といったことも、やはり説明されていません。一方、これも概説などで、満洲八旗の他に蒙古八旗・漢軍八旗をつくったことがよく知られていますが、(d)では「各旗はさらに満洲・蒙古・漢軍に分れ」と言われており、「他に」つくったとは言っていません。しかも、「合せて二十四旗である」と書いてありますが、歴史上あくまで「八旗制」であって、「二十四旗制」という言葉はありません。こういう矛盾が史料に見出されるのに、それが全然説明されていない。そこで私が考えた説明は、以下のようなものです。

まず、先ほど申しましたように、ニル<ジャラン<グサというピラミッド型組織があることは事実で、私はこれを、中国の学者の言い方を借りて「グサーニル制」と呼んでいます。これが中央ユーラシア的な階層組織体系であることはつとに指摘されているところで、匈奴やモンゴルなど遊牧国家の軍隊は、十人隊<百人隊<千人隊<万人隊というピラミッド型組織をつくっており、従来、この一事のみを以て八旗制は内陸アジア的だといわれてきました。しかし、それ以外の部分については説明されていません。そこでまず注目すべきは、八旗が上三旗と五旗に分れるという点です。(c)に、五旗はそれぞれ王やバイレらに統率させる、とあったように、各旗には上級の王族が分封されており、彼らは階層組織とは区別されて、その上に立って旗を支配していました。私はこのような側面を「旗王制」と呼んで、「グサーニル制」とは区別して捉えるべきだと考えています。

資料⑥をご覧ください。八旗の各旗をカードのように立てて描いたもので、このうち鑲黄・正黄・正白の3軍団が皇帝が直接領している軍団であり、それより後ろの五

資料⑥



旗は、一族の旗王が支配するものとされています。実は初期の漢文では、この「上三旗」が抬頭されています。これはつまり、ここでの「上」は「上下」の「上」ではなく、「皇帝陛下の三軍団」だということであり、これを裏返していえば、皇帝自身が八旗全てを率いているのではないということをも意味しています。ピラミッド状の8個師団からなる国軍といったものではないのです。各旗に属する旗人たちは、国家の構成

員としては確かに国軍の将兵ではあるのですが、ふだんの統属関係についていえば、例えば「私は正黄旗の満洲所属で、皇帝陛下の直参です」と言ったり、あるいは「私は同じ満洲所属ではありますが、私は鑲白旗なので〇〇親王の家中です」などと答えることとなります。ですので、国軍としての用務以外の時には、自らの主の命に従うという関係になっています。組織体系や出陣の際の隊形などは、画一的にニル<ジャラン<グサとなっているのですが、それは近代軍隊のように、封建軍隊、つまり中世のヨーロッパや日本の幕藩体制のように、それぞれの主君に従っているのです。私は、そのような官僚制・主従制の二重の関係にあるのが八旗制度というものであると理解しています。

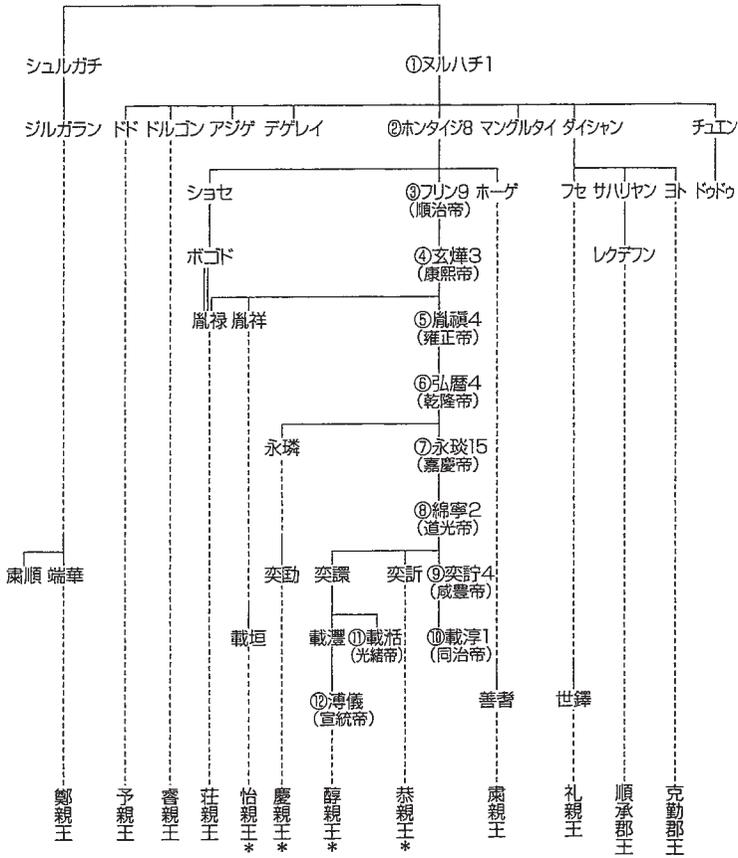
では、命令の伝達、負担の賦課といった事務的な事柄をどう処理したでしょうか。いきなり何十何百もあるニルに命令したり、何かを徴収したりするのは大変です。私は、学生にはよく次のような譬えで説明します。すなわち、八旗を8クラスからなる学年と考えてみるのです。その場合、ニルは生徒、ジャランは生徒を集めた班ということになります。25人のクラスで配布物を配ったり、修学旅行などで個別に行動させ

る時、ばらばらにやると大変なので、5人1組で班をつくらせて、「班長だけプリントを取りに来い」などと指示するわけです。これがニルくジャランくグサのグサーニル制に当たります。他方、成績をつけるとか面談をするといったことは、担任の先生と各生徒との直接かつ個別の関係になります。つまり、旗王とは担任に当たるといふことになり、この場合は、班すなわちジャランというピラミッド型組織における中間単位は必要ありません。このような統属関係の面が、旗王制に当たります。旗＝グサの長官はグサ＝エジェン (gūsai ejen)、漢語では都統といますが、これはあくまでも支配者ではなく、責任者です。その上に乗っているのが、資料⑧で王冠で示した旗王で、旗王はピラミッド型組織の中には含まれておりません。いわば、担任の先生と学級委員長とは全く身分が違うのと同じように、両者は截然と区別されているのです。康熙年間以降は、旗王も都統を務めるようになっていきますが、あくまでもそれは役職を割り振られているだけで、身分が王族であるという点では、一般の旗人の都統とは全く隔絶した存在でした。

このように、ピラミッド型組織は皇帝に直接統率されていたわけではなく、王族がピラミッド型組織の中に埋めこまれて公務員の1人になってしまったわけでもありませんでした。戦国時代の日本と同じような殿様一家来の関係で成り立っていたジュシェン社会において、最初はヌルハチと抗争を展開していた各豪族たちの勢力を、統合とともに国軍に再編成し、しかも手柄のあった王族たちにそれぞれ分封していく仕組み、それが八旗なのです。他方、軍門に下るまでは一国一城の主だった者も、たとえ服属後に優遇されたとしても、あくまで大臣としての待遇であって、王族とははっきり線が引かれたのです。

資料⑦の略系図をご覧ください。八旗は、この系図に出てくるヌルハチとその息子・甥・孫たちが分け持っており、一族でも遠縁の者はいませんし、外様大名はおりません。これは中央ユーラシアでもモンゴル帝国以降の特徴で、キプチャク＝ハン国すなわちジョチ＝ウルスや、イル＝ハン国すなわちフレグ＝ウルス、チャガタイ＝ハン国すなわちチャガタイ＝ウルスのように、モンゴル帝国の場合にもハン国と呼ばれる大型ウルスは全てチンギス＝カンの直系で、外様大名のような異姓のハン国はなく、全て王族で分割領有していました。八旗もそれと同じです。例えば、鑲白旗などは旗王の系統が変動しましたが、両紅旗は、ヌルハチの次子ダイシャン (Daišan 代善) の子孫が清の滅亡まで変ることなく保持しつづけました。またヌルハチの弟シュルガチ (Šurgaci 舒爾哈齊) の子孫は、鄭親王家として、これまた清の滅亡に至るまで鑲藍旗を

資料⑦



支配しつづけます。これらが尾張藩・紀州藩のように高い地位を保ちつづける一方で、全体の8分の3、すなわち上三旗を持っているのが皇帝というわけです。八旗は、こういう連合体制を採っていました。

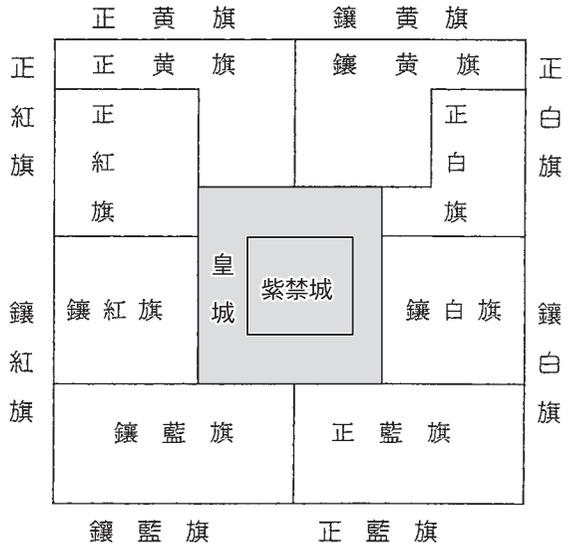
そして、ヌルハチの軍門に下るまでヌルハチのライバルだったジュシェンの首長たちとその一族は、いわば譜代大名として組み替えられて、各旗王の組下に入れられることとなります。ニルの中身は、一皮むけば今度は先祖代々の領民を率いる元ジュシェン首長たちだというわけで、しかもそれが、中隊―連隊のような組織に編成されていくのです。このように、強力な指導力によって画一的な組織にはめこんでいく一方で、彼らが完全に職業軍人、サラリーマンのようになってしまったというわけでもない。殿様一家来のような関係を、厳格な組織体系の中に埋めこんで活かしているというのが、八旗制の特徴だといえます。その上で、旗人たちもまた征服の果実に与れた

のです。そうでなければ、王族だけがよい思いをする制度に組み替えたところで、征服された連中が納得するとはとうてい思われぬのです。

さて、次に (b) の左右翼です。資料⑥の図のそれぞれの旗に㊦㊧と書きこんでおきましたが、これは左翼・右翼の区別を示しています。実は、この左翼・右翼の区別にはちゃんと意味があるのです。一列にしたとき、「鑲黄・正黄・正白・正紅・鑲白・鑲紅・正藍・鑲藍」と、鑲・正の順でも黄・白の順でもなく、一見無規則に並んでいるように見えますが、実は左・右・左・右と、交互になるように配列されているのです。この序列の意味を考えるために、資料⑧をご覧ください。これは、紫禁城を中心とした八旗の配置です。左右とは、日本の京都と同じで、北から南に向かって、すなわち図では上から下に向かって右・左となります。したがって、左翼は向かって右（東側）、右翼は向かって左（西側）です。このうち左翼を見ますと、そこは鑲黄・正白・鑲白・正藍となっていますね。これを資料⑥の図と見比べると、資料⑥で㊦とあるのは、鑲黄、一つとんで正白、一つとんで鑲白、一つとんで正藍となっていました。つまり、左翼とされる旗は、北から南に向かった時の左、すなわち東側に4旗がずらりと並ぶようになっているのです。右翼も同様です。このように、左右翼というのは、一列に並んだ時には鑲黄をトップとし鑲藍を最後とする序列であり、それが左右にそれぞれ分れた時には、北側に中心、すなわち黄旗を北に据えた上で、左右それぞれに陣形を展開し、最末端の左右の藍旗が合体した時に包圍網が完成するというものなのです。

これは巻狩りの配置で、さらに明の城郭都市を包圍する時にもこのような陣形をとりました。北京に入った時、漢人たちを全て追い出して、今の北京の内城区画を八旗の兵舎にしますが、その時の居住地の割り振りもこのようになっており、現在の北京にもその名残りを見出すことができます。つまり、左右翼は巻狩りの態勢であり、城攻めの態勢でもあり、また居住地の割り振りでもあって、戦争や巻狩りを最たるものとしつつ、ふ

資料⑧



だんの集団生活の基準にもなっていたのです。匈奴—突厥—モンゴルと、一貫して強調されてきた左右翼制は、このように八旗制の中にも非常にシステマティックに生きています。そのような点で、八旗を内陸アジア的、中央ユーラシア的ということができると思います。

そのことをふまえた上で、さらに資料⑥をご覧ください。各旗の構成を見ますと、その中がそれぞれ満洲・蒙古・漢軍の外旗と包衣^{ボーイ}の内旗とに分れています。外旗は、ヌルハチの時代には全て満洲だったのですが、やがて勢力が拡大すると、遼東地方の漢人や南モンゴルのモンゴル人などが多数加わるようになります。漢人は騎兵になれませんが、その代り、鉄砲・大砲を製造・操作することができます。またモンゴル人は、基本的に歩兵ではなく騎兵です。そこで、それらの人数が増えてくると、まずニルの段階で、満洲ニルから独立させて蒙古ニル・漢軍ニルを組織していきます。やがてそれが何十にも増えると、グサをつくろうということになる。これは、1個師団の中に歩兵連隊と戦車大隊、あるいは砲兵中隊などが含まれているようなもので、いわば兵種です。先に引用した『大清会典』で「二十四旗」と言っているのは、八旗が二十四旗になったのではなくて、1旗の中で兵種が三つに分れて歩兵—騎兵—砲兵のようになっている、ということなのです。

例えば、実際に戦争に赴いたり訓練したりする時には、漢軍は砲兵隊ですので、満洲・モンゴルなどとは一緒に行動できませんし、また行動する必要もありません。「各旗から漢軍だけ出てこい」と言われたら、鑲黄旗漢軍、正白旗漢軍、鑲藍旗漢軍、といった形で漢軍の部隊だけが出てきて集合し、漢軍だけで八つの部隊を形成することになります。これが漢軍八旗です。しかし、ふだん給料をもらったり、儀式で整列したりする時には、漢軍かどうかではなく、所属旗を単位とすることになります。先ほどの譬えでいいますと、高校などで、同じクラスでも、芸術の時間になると美術・音楽・書道と三つの選択に分かれる、あるいは地歴の時間に日本史・世界史・地理の選択にそれぞれ分れるようなものです。地歴の時間になると、各クラスから世界史選択者だけが集まって世界史のクラスをつくる、しかし、あくまで自分のクラスや担任の先生は別にある——これが「二十四旗」の仕組みなのです。

これら外旗と並んで、内旗というものがありました。外旗の各ニルは、世が世ならヌルハチに従わずに独立した勢力であった連中を再編成したものですので、皇帝や旗王としては、これとは別に自分のために奉仕させる直属の組織が必要です。それがボーイ=ニル (booi niru 包衣^{ボーイ})、すなわち家のニルと呼ばれる組織で、勝手方、御料地に当

るものです。満洲・蒙古・漢軍という外旗の軍役や賦役は国家に納められますが、包衣すなわち内旗の生産物や労働は、皇帝や旗王が直接取ります。彼らの家政機関はボーイ=ニルを組織したもので、旗王の場合は王府といますが、皇帝直属の上三旗包衣による組織が、溥儀の回想録にもたびたび出てくる内務府です。蘇州織造などが調達する絹織物や、景德鎮の陶器など、御用達のものは全て内務府が取り仕切っており、宮廷演劇を担当していたのも内務府です。すなわち、皇帝の内務を担当する組織は、国家機関ではなく、八旗全体の機関でもなく、領主としての皇帝の、私的な家の機関であったのです。

以上をふまえて、全体をまとめておきましょう。皇帝・旗王は、外旗を構成する旗分ニル (gūsai ubu niru) と内旗のボーイ=ニルとを麾下として八旗を分有支配しており、ニル・グサはそれぞれ満洲・蒙古・漢軍からなる多民族編成を取っています。さらに、グサを組織したのは満・蒙・漢ですが、朝鮮やロシア・ベトナム・チベットなど、グサをつくるほどは多くないけれどもニルをつくるくらいの数にはいる集団についても、ニルに組織しています。例えば、ネルチンスク条約に至る過程で捕虜になったロシア人は、オロス(ロシア)=ニルに編成されて、八旗満洲に所属しています。そして、時間の関係で詳しく説明することができませんが、八旗の各旗は、旗を単位として権利・義務が均等に配分されており、これを「^{はちぶん}八分体制」といいます。つまり、八旗においては皇帝もあくまで旗王の1人にすぎず、ただ8分の3を持っているから比較多数になるだけのことであって、中国的な絶対君主ではないのです。また、皇帝・旗王は、側近組織としてヒヤ (hiya 轄, 蝦) と呼ばれる親衛隊を持っていました。これは、麾下のニルとはまた別に、日本の馬廻衆・小姓のように、部下を側近としてピックアップして組織したもので、モンゴル帝国における大ハーンの親衛隊であるケシク (kešig 怯薛) に相当するものです。

つまり、八旗制の特質は、中央ユーラシア的な軍政一致体制とマンジュ的な均分原則とを融合させた点にあり、単にニル<ジャラン<グサという階層組織に編成されているというだけでなく、内陸アジア的、中央ユーラシア的な本質をもっているといえるでしょう。それが歴史上最もシステムティックに、制度的に精密に設計されたものが八旗だというわけで、その骨格の部分は、匈奴からモンゴルに至る遊牧国家と多くの共通項をもっていると思います。

このように八旗制は、さまざまな面において、官僚制的な階層組織体系と旗王一旗人を主軸とする主従制的麾下支配との二重支配をなしていました。そして、旗人たち

は旗籍に登録されて民人とは区別され、商工業に従事することが禁止されていました。彼らは、もちろん軍人・軍属ではあるものの、軍隊そのものというよりも、文武官員の人材供給源として機能しました。

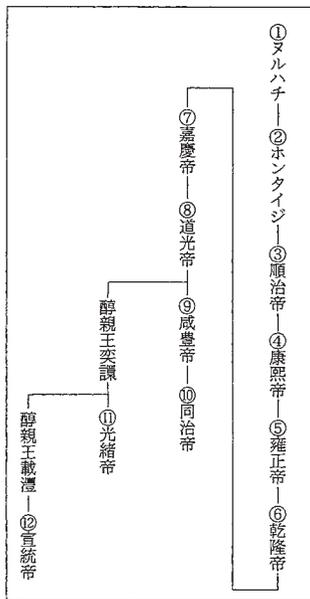
八旗制は、さらに統治組織の雛型として、外藩と呼ばれる領域にも適用されていきました。これがモンゴルで布かれた盟旗制で、現在でも、内モンゴルや新疆などの地域では、ホルチン左翼中旗などといった形で、行政区分として〇〇旗という呼称が使われています。旗とニルからなる八旗の組織体系を、通好したり降伏したりして清に従うようになったモンゴル諸勢力に当てはめていったのです。これは決して一から編成したものではなく、「お前はこれまで〇〇ハーンと言っていたけれども、これからはお前は〇〇親王だ。お前の集団は〇〇部ではなく、〇〇旗だ」といったふうに、いわば名前を呼び換えて、義務を課しただけなのです。もし牧地や属民を召し上げられたのであれば、モンゴル王公は黙っていません。従来からの統属関係を、八旗を雛型として整頓したのが盟旗制なのです。

八旗と国制に関わるもう一つの特徴は、皇帝と王族の役割と位置づけの大きさ、独特さです。明の場合、王族は血統を維持するために必要ではあるけれども、晋代の八王の乱のようなことがあっては困るし、何より永楽帝自身がクーデターで即位している

ので、それが繰り返されることのないよう、王族の政治への関与を一切禁じていました。また、王族の地位自体も、時代が下るにつれて抑えられていました。その結果、総じて王族が「無駄飯喰らい」化していく趨勢にあったわけです。それに対して清の大きな特徴は、王族自身が文武官僚の大きな人材供給源をなしており、かつ身分が非常に高いということです。清末に政界の実力者として恭親王奕訢えいきんのような人物が出てくるのも、明とは違って王族が大臣の供給源となっている、いわば松平定信のような徳川一門出身の老中が出てくるのと同様の構造が当たり前とされていたからにほかなりません。

具体的に系図を確かめてみましょう。資料⑨のような系図をご覧になったことがあるかと思います。歴代皇帝はヌルハチからまっすぐ一本線で続いていて、いかにも中国の王朝という感じがし、西太后の子である

資料⑨



同治帝のところから怪しくなってきた、最後の方がゴチャゴチャとするようになって、いかにも滅亡前の混乱のように感じる、といったところではないでしょうか。しかし、実はそうではありません。資料⑦の系図と見比べてください。資料⑨のような系譜は、実は枝を取り払ったからシンプルに見えるだけで、まっすぐつながっているのは結果にすぎないのです。系図中、①～⑫とあるのは皇帝の代数で、たしかに第10代同治帝までまっすぐ一本ではありますが、資料⑦で名前の右側にある数字をご覧ください。これは第何男子かを示す数字です。初代ヌルハチは長男ですが、これはたまたまで、それ以降を見てみると、第2代ホンタイジは16男中の8男ですし、その息子の順治帝も9男です。入関後に即位した康熙帝も3男、雍正帝は4男、乾隆帝も4男。そして89歳まで生きた乾隆帝の場合、年長の息子たちは父親よりも先に次々死んでいますので、次に即位した嘉慶帝は、実に15男なのです。このように、ヌルハチ以降、咸豊帝と西太后との間の一人息子であって選択の余地のなかった同治帝まで、長男で即位した皇帝はいないのです。そして、同治帝が子供を残さずに死んだ結果、帝位が横にスライドすることになりました。

このように、皇帝の座に即くのは、何も年長だからということではなく、いずれも競争の中で即位しているのです。継承に当たっては、創業者ヌルハチもホンタイジも、後継者を自分で指名することはできませんでした。皇太子がいないどころか、先帝の没後に王族たちが話し合って、次の皇帝が選出されたのです。モンゴル帝国もそうでしたし、ティムール帝国もムガル帝国も同様でした。これは、その時一番有能な人物を指導者に選出しないと、その集団全体が危機にさらされるという、苛酷な環境に生きるテュルク・モンゴル・ツングースの社会の特徴です。馬鹿でも何でもいいからとにかく長男が後継者だというのは、「その長男が無能だったらどうするのか」ということになります。継承ごとに跡目争いが起るリスクよりも、その時最良な人物を選出する方が、仮に多少揉めたとしてもましだという考え方です。清では、順治帝の没時以降は後継者指名制になり、雍正帝のとき、有名な儲位密建制度——宮中の匾額ちよいみつけんの裏に後継指名を遺言として置いておき、没時に公表する制度——を定めます。このようにして、先帝が後継者を指名できるにはなりますが、皇帝が活着している間は誰が指名されるか分らず、皇帝が没してはじめて「亡くなられた先帝が指名されたのは第○皇子である」ということが分るといことは一貫しています。その時の皇帝が健全な間は、誰が後継者になるかは分らない仕組みなのです。この結果、諸皇子や皇子に従っている旗人たちは、「自分にも、わが殿にも、次代皇帝の座が廻ってくるかもしれ

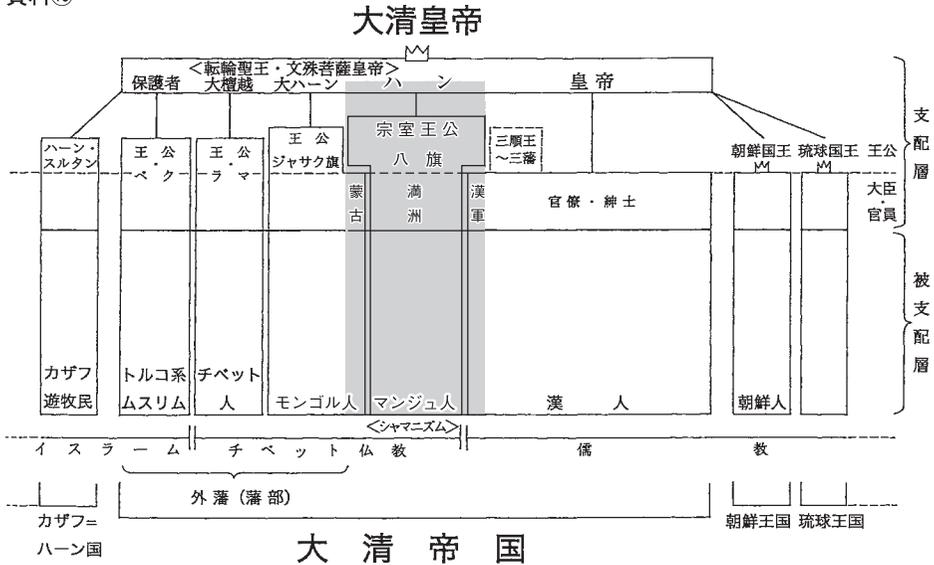
ない」と思ってよく働き、また無用な派閥抗争が生まれにくくなる。康熙帝が皇太子制度を導入しようとしても結局失敗したのは、このようなメンタリティーが存するところに中国的制度を持ちこんでも、受け容れられなかったからにほかなりません。

他方、王族たちの地位も格別でした。とりわけ、ヌルハチの息子や孫、甥たちは、建国の時の一門ですから、創業と天下平定に当って大変な功績があったということで、高い位置づけを与えられていました。これを「八鉄帽子王」「八大王」などといい、資料⑦の系図で点線の下に王号が書いてある諸家です。例えば、咸豊帝の死後、西太后と恭親王奕訢とがクーデターで実権を握りますが、咸豊帝から「後を頼む」と言われていたのは、実は系図左端の列の鄭親王端華やその弟の肅順たちでした。いわば紀州藩や尾張藩の当主のような遠縁の当主の方が、時の皇帝の兄弟と同格かそれ以上の位置づけを与えられていたのです。初代の時の位置づけや決まりごとがその後もずっと尊重されるというのは、明朝とは全く逆です。明の場合、洪武帝や永楽帝の息子たちの家系は段々とフェードアウトして行って、明の後半にはほとんど出てきません。それに対して清の場合、日本の徳川一門やモンゴル帝国と同じように、初代に始まる一門が偉いのです。例えば、川島芳子の実父として知られる肅親王善耆ぜんきの家はホントイジの子ホーゲ (Hooge 豪格) に始まるもので、家祖のホーゲは、長男でありながら幼弟の順治帝に帝位を取られてしまうのですが、しかし一族は清末に至るまで有力でありつづけました。このように、王族は極めて身分が高く、帝位継承は其中でも嫡出子間の実力主義だったのです。

もう一つ注意されるのは、女性の役割の大きさです。清においては皇后や皇太后の影響力が非常に強く、例えば西太后で有名な垂簾聽政すいれんちやうせいは、実は王朝としては2度目のことであって、順治帝・康熙帝の幼少期にも、ホントイジの未亡人であるモンゴル人の孝莊文皇太后 (太皇太后) が実質的な後見人を務めていました。このような点でも、オゴデイおよびグユクの没後に、それぞれの未亡人が国事を代行したモンゴル帝国とよく似ています。つまり、清末に恭親王と西太后の2人が政局を動かしたというのは、中国の前近代王朝の特徴ではなく、マンジュ・モンゴルの特徴であるといえます。もしこれが明のような漢人王朝であったなら、実権を握ったのは宦官か内閣大学士だったことでしょう。そのどちらでもなく、皇太后と王族が実権を握ったというのは、一見いかにも前近代的というイメージをもつかもかもしれませんが、実は決して一般的なものではなく、むしろマンジュ王朝としての特徴とみるべきなのです。

さらに支配層全体を見渡すと、同盟者であるモンゴルやチベットの王侯貴族も宗室

資料⑩



と同じ扱いを受けており、やはり非常に地位が高い。その点でいいますと、人数や経済規模は措くとして、世襲王公がない漢人の方が、帝国の構成要素全体の中においては浮いているともいえます。そこで、資料⑩として掲げた概念図をご覧ください。これは、次のように説明できるかと思えます。

すなわち、中華帝国を説明する時によく用いられる同心円的な構造——皇帝を円の中心として、外へ向かって内地—藩部—朝貢国……が並ぶ——ではなく、内陸アジア的、中央ユーラシア的な視点から見ると、ハーンとしての皇帝の下には、網掛けにしてあるように、八旗を率いる宗室王公が中央に陣取っており、その属下は満洲・蒙古・漢軍に分れる。右側を見ると、漢人は、一部が八旗に入っている以外ほとんどが民人として戸籍に編成されていて、三藩が消滅した後は、王公がないまま、科挙に合格した官僚や紳士が直接皇帝に従うという、一君万民の世界になっている。さらに琉球や朝鮮も、その延長上に位置づけられる。われわれは、この部分だけを見て中華帝国だと思ってしまいがちですが、中心部分はそうではなくて、殿様一家来の関係になっているのです。ひるがえって左方は、宗室王公と並び立つジャサク(jasak 扎薩克)王公としてのモンゴル王公が、いわば外様大名として在来の牧民集団を率いており、大清皇帝は大ハーンとして君臨している。さらに、世俗の王公や大寺院が、東大寺や興福寺のように荘園を持っているチベットにおいては、大清皇帝はダライ=ラマの檀家として、そして自分自身が転輪聖王、文殊菩薩皇帝という仏教的な化身として君臨

し、彼らからの忠誠を集めている。「棚からぼたもち」式に転がりこんできた新疆の東トルキスタンのムスリムに対しては、ふさわしい名分がないのですが、一応は保護者の立場で臨みます。ただし、「保護者」といっても積極的に保護するのではなく、「税金さえ払い、不穏なことさえしないなら、これまで通り信仰してかまわない」という程度の意味での保護者です。そして現地の王公やベクといわれる有力者には、やはり同じように爵位を与え、それを通して支配する。

このように、東から見た帝国像と西から見た帝国像は全く違っているものであり、これが1人の大清皇帝の存在によって融合しているのが大清帝国の構造である、と私は考えています。この図で分りますように、帝国の頂点にさまざまな顔をもつ大清皇帝が君臨している以外は、現地では基本的には従来の統治が踏襲されていることができます。図の右方についていえば、漢地では、どこそこは鑲藍旗だとか正白旗だとかいった形の領地は全く設定していないので、漢人にしてみれば明の時と同じなのです。科挙もやってくれる。せいぜい「皇帝陛下が辮髪に変わったなあ」という程度です(笑)。では、漢地に入ったマンジュ人が儒教的な倫理に心服したかということ、そういうわけではありません。むしろ、彼ら固有の要素と、漢人などそれ以外の要素とを融合させたというべきです。

そのことをはっきりと示すのが、「巡礼圏」です。ベネディクト=アンダーソンが言う意味での、官僚の巡礼圏のことです。科挙官僚の巡礼圏は、19世紀の洋務運動期までは、原則として資料⑩図の右半分に限定されていました。彼らは漢地統治にしか関与できず、そのため、例えばネルチンスク条約の締結には、漢人の大臣は1人も関わっていません。その資格がないのです。あるいは、チベットに派遣された軍事顧問団やモンゴルに送った駐屯軍司令官といった役職には、漢人の科挙官僚は任用されないことになっていました。これに対して、旗人の巡礼圏は全土に及びます。広東の長官であろうが、アムール地方で毛皮を集めようが、カシュガル方面でムスリムの相手しようが、ダライ=ラマの下で政務を監督しようが、さらには琉球や朝鮮に使者として赴こうが、旗人はこれら全てに関わることができました。この体制が崩れていくのが19世紀で、最後は漢人が主導する王朝になっていったといえるでしょうが、前近代においてはそうではなかったということが重要なのです。

以上が、八旗制とそれに基づく国家の支配構造の説明です。先ほど資料⑥をご覧いただきましたが、八旗制度は、軍隊としてだけでなく、領民まで含んだ組織として国家体制の根幹をなしましたから、大清帝国の中核は、ちょうど日本の「幕藩制国家」に

相当する「八旗制国家」とでもいうべきものであったといえます。マンチュリアで形成されたこの国家は、中央ユーラシア的な性格をもっていました。ただし、では遊牧国家とってよいかというと、それは言いすぎになります。私が中央ユーラシア国家というあまり聞きなれない表現を用いるのは、モンゴル帝国のような遊牧国家と比較しますと、マンジュ人は遊牧をしていないので、遊牧国家とまでは言えないからです。しかし、それと同種の国家であったことは間違いなく、それを中央ユーラシア国家と表現しています。

その中でのマンジュ的特質は、八旗制に基づく人事や組織が強い力を発揮した、という点です。これがもし、日本のように〇〇藩〇〇家や、モンゴル帝国のチャガタイ家・フレグ家のように、「家」を単位にしていると、世代が進むにつれて細分化していったり、仲間割れしたりしたと思うのですが、八旗制の組織はそれらとは違って、現在でいうところの法人格のような性格をもっていました。それは生身の〇〇親王家とは距離をおいた組織で、そこに権限やポストを配分していくのです。ちょうど、学部ごとに学生委員や教務委員などを教員に割り振ったり、その代りサバティカルの権利も学部ごとに配分するようなものです(笑)。このように利益と義務を、常に八旗を単位に割り振っていくのです。これは非常に巧妙にできた制度で、有効であったと私は考えています。

最初にお話ししましたように、彼らは定住する習慣をもともともっていました。しかもヌルハチは、明確な政策として集住を徹底させました。もともとジュシェン人は、中世の日本とまさに同じで、世代が変わるごとに各自が砦を築いたりして、どんどん枝分れしてしまい、その結果、例えば狭い尾張の中に織田氏だけでも多数の城を築いて割拠していたのと同じような状況になっていたのですが、ヌルハチは徹底的な集住政策を採って、全ての臣下を自らの居城に集住させました。この政策はその後も堅持され、遼東に進出して瀋陽へ移る時も、瀋陽から北京に入った際にも、王公・家臣全てを首都に集住させておきました。

これらの政策が奏功して、大清帝国は300年にわたって求心力を維持することができたのです。世界的に見ても稀なことに、清においては、支配層内部の反乱が皆無です。太平天国などは支配されている側の反乱、三藩の乱は漢人軍団の反乱で、いずれもマンジュ人支配層の起したものではありません。マンジュ王公のクーデターや旗人の反乱は、ついに最後まで発生することはなかったのです。何か起らないと注目しないというのは歴史学の欠点ですが(笑)、これはもっと驚いてよいことだと思います。

さらに視野を広げて、帝国全体の統合を維持できた秘訣についていえば、それはマンジュ的なものを一方的に押しつけたのではなく、さまざまな複合性があったということが挙げられます。例えば、血統の論理と実力主義の論理の複合です。ヌルハチの一人しか支配権をもたないという血統の論理が一方にあります。その中で後継者を誰にするかは実力主義です。他方、科擧のような別の形の実力主義も認めている。あるいはまた、マンジュ的な共同領有の論理と儒教的な一君万民の論理も同居させています。こうした複合性が、強靱な支配を支えていたといえるでしょう。その上で中央ユーラシア的といえるのは、やはり軍勢力と権力構造の根幹が八旗制であったこと、それと定住民との提携、この場合は漢人との分業体制をとったことです。ひるがえって、東アジア的といえるのは、やはり漢地への経済的依存です。加えて、人口のとてもないアンバランスさ、マンジュ語を公用語にしつつも漢字・漢語で処理する部分の圧倒的な大きさ——こういった諸点が、後になるほど効いてきます。

そのような状況下での帝国の運営原則は、権力への“近さ”によるコントロールであったといえることができるでしょう。これは、全体を統べる皇帝に対する、時間的・血縁的・空間的な“近さ”の序列、ということです。例えば、全臣民にチベット仏教の信仰を押しつけても漢人が言うことを聞かないのは当然です。だからといって儒教の論理を振りかざしても、モンゴル人もチベット人も納得しない。そういう特定のイデオロギーを押しつけることはせず、皇帝はそれぞれに向けた役割を振る舞って支持・忠誠を調達し、代りに王朝に対してどれだけ役に立っているかという点から序列をつけるのです。その基準が「近さ」です。時間的とはどういうことかということ、早く服従した者が上位に来るという原則です。親藩＞譜代＞外様の序列と同じです。帝国全体の中で八旗が格上なのは、いわば譜代の旗本ですから当然のことです。その八旗の中では満洲＞蒙古＞漢軍という序列があり、満洲が上になります。また漢軍は、1644年以前に従っていますから、一般の漢人よりは上になります。そのように考えれば、この序列には何の不思議もありません。また血縁的な近さからいうと、血縁の宗室王公＞姻戚のモンゴル王公＞遠戚・姻戚の満洲旗人＞それ以外、という序列になります。空間的というのは、皇帝に対しどれだけ空間的に近づけるかという特権のことで、御前に勤務できるのが最上の名誉です。皇帝は、個人をピックアップすることでこれを操作しており、御前大臣や軍機大臣への任用は、その最たるものです。また、モンゴル王公の息子などを北京で親衛隊に入れて側仕えさせ、成長したらモンゴル高原に帰って王公位を継がせるといった形で、恩寵を授けるといってもしています。

たしかに、帝国は巨大な官僚機構で動かしているわけですが、それは本質ではなく、ルーティンの部分にすぎません。それに対して、帝国の本質はこういう「側近政治」であったと私は考えています。宮崎市定氏の著作で有名な「奏摺政治」も本質は同じで、仮に距離的に遠いところにおいても、ダイレクトに皇帝に手紙を送ることができる、そういう意味での「近さ」を保証するのが奏摺ですから、それによってコントロールしているという点では同じであると思います。また、親衛隊すなわち「侍衛」というのは、文字通り皇帝のすぐ傍にいないければ「侍衛」にならないはずなのですが、実際には、その「侍衛」がダライ=ラマの宮廷へ行って何年も滞在するとか、朝鮮などへ使者として赴くとかいうことがしょっちゅうあります。皇帝の傍におらず「侍衛していないではないか」と言いたいところですが、そうではない。「侍衛」とは「皇帝に信任された、“近い”存在」という意味であって、物理的に皇帝の傍にいらなくてもかまわないのです。このような意味での側近政治の構造は、大清帝国に一貫しているといえましょう。科挙制度で積み上げられた官僚機構はもちろんあるのですが、それを本質と考えるわけにはいかないと思います。

3. 「ユーラシアの大清帝国」から「東アジアの“中国”」へ

最後に、近代へのつながりを簡単に説明しておきたいと思います。ここまで中央ユーラシア世界という舞台や、中央ユーラシア国家的性格を強調してきましたが、それは近代にどうなったのでしょうか。背景として考えるべきなのは、世界史的な構造転換です。

一つは、中央ユーラシアの「周縁化」、すなわち周囲の世界との力関係の逆転です。第一には、軍事・交通両面での逆転です。18世紀後半から19世紀にかけて、騎馬軍事力が優勢であった時代がついに終わり、また交通の面でも、鉄道や蒸気船に物流、速さ、正確さなどもろもろの面で劣るようになっていきます。スキタイ・匈奴以来、中央ユーラシアの諸勢力の優位を支えてきた騎馬という手段が、軍事的にも交通技術上も劣勢に立たされるに至ったのです。第二は、人口のもつ意味の逆転です。前近代においては、人口が少ないということは必ずしも弱点とは限らず、むしろ少数精鋭でさえあれば、身軽さという利点ともなりえました。想定外の災害に見舞われた時、モンゴル大元帝国が漢地を捨ててモンゴル高原に帰ったのが好例です。前近代の技術や生産の水準では、大人口は、いったん食べさせてやれなくなるとどうすることもできな

いのです。すると暴動・反乱が起こって、政権が倒れてしまう。ところが近代は、「人口こそ国力」の時代です。しかも、人が住んでいないところは「無主の地」ということで他国に占有されてしまうかもしれない。そのような時代になると、マンジュ人であろうがモンゴル人であろうが、人口が少ないということはもはや強みではなく、「少数民族」への転落を意味するのです。しかも彼らが直面していた相手は、あの圧倒的な人口規模をもつ漢人でしたから、人口による有利・不利が逆転してしまっただけで、どうにもならないのです。

もう一つの構造転換は、「帝国」から「国民国家」へという逆転です。先ほどの資料⑩の図で説明しましたように、帝国とは、多面的な性格をもつ君主が多面的な構成要素を統合する政体ですが、近代になると、「一つの国土に一つの国民」というフィクションを理念として掲げた国民国家の時代が到来します。国民国家は、タテすなわち上下——統治者と被治者——の一体性を武器とする代りに、ヨコすなわち多民族・多文化の共存に対しては不寛容であることを特徴としています。それによって、効率的かつ徹底的な国力の動員が可能になる。しかし、構成要素の多様性を維持したままそこから国力を引き出していた帝国が、それを模倣して国民国家になろうとしたならば、帝国はバラバラにならざるをえません。オスマン帝国やハプスブルク君主国が直面したのも、同じ課題であったといえるでしょう。国民国家の潮流に対抗するには、ユーラシアの諸帝国は、構成要素のどこかに軸足を移すしかなくなります。その結果、マンジュ人君主による複合帝国だった大清は、「中国」に姿を変えていきますし、オスマン帝国は、普遍的なイスラーム国家から「トルコ」に変貌していき、その代りアラブを放棄することになります。また、それまで「少数精鋭」だった支配集団は「少数民族」化していくことになり、例えばマンジュ人は「漢化」して生き残るしか道がなくなり、またインドでは、それまで支配層の側だったムスリムが主導権を失っていくことになります。

そのようなことを念頭におくならば、大清帝国の19世紀は、支配構造の転換期だったのであり、王朝の腐敗云々という道徳論で語れるものではありません。マンジュ・モンゴルの連合国家だったものが、もはや漢人に依存せざるをえなくなった結果、マンジュ王朝から「中国」の一王朝へと自ら姿を変えていくのです。しかしこれは、モンゴルやチベットなど同盟者からすれば、マンジュ人の皇帝が、自分たちを見放して漢人と手を組んだということになります。19世紀末以降の改革から辛亥革命に至る過程は、資料⑩の上部に示したように、皇帝であり大ハーンでもあり、転輪聖王でもあ

り大檀越^{だんおつ}でもあった大清皇帝が、中華皇帝だけになっていこうとするプロセスであったということが出来ます。しかし、それは最終的に失敗し、この王冠が取り去られて、民国が出現することになります。そのとき代わってここに据えられたのが、「中国」という観念です。革命側の論理は、殷・周～明・清と王朝は変っても、中国という不変のまとまりが一貫して存し、それが帝政から共和政に転換しただけだ、というものです。しかし、資料⑩の図の左方の人びとにしてみると、「自分たちはマンジュ人の皇帝に臣従したのであって、その皇帝が退位したのであれば、臣属以前の状況に戻るだけのことだ。漢人は同僚だっただけなので、放っておいてもらいたい」ということになります。彼らにとって辛亥革命とは、全体を統合していた「大清皇帝」の消滅を意味するものであり、であれば、モンゴルでもチベットでも、それぞれ独自の君主、政府を立てて、再びかつてのように独自の道を歩むのは当然だということになります。それがモンゴルのボクト=ハーン政権であり、チベットのダライ=ラマ政権であったわけです——後者は1950年代に最終的に破壊されることとなります。

このような、現在にもつながる動きは、もとをただせば、清がどのような構造をした複合帝国であったか、というところに溯って考えなくてはならないと思います。「ユーラシアの大清帝国」から「東アジアの中国」へと転換したのは19世紀後半で、われわれは転換後の姿から溯って前近代を理解してしまうことが多いのですが、それでは問題の根源と経緯を見失ってしまうのではないのでしょうか。ではその出発点とはいえますと、マンジュ的、さらには中央ユーラシア的というべき性格・特質にあり、それが集約的に現れていたのが八旗制度であって、これが大清帝国の根幹にあったと、私は考えております。

以上で報告を終わらせていただきます。

【関係拙稿一覧】* 史料的根拠および先行研究・他学説については、これらを参照。

- ①『大清帝国の形成と八旗制』名古屋大学出版会、2015年。
- ②「マンジュ国から大清帝国へ——その勃興と展開」「大清帝国の支配構造——マンジュ（満洲）王朝としての」『近世ユーラシアのなかの大清帝国——オスマン、サファヴィー、ムガル、そして“アイシン=ギョロ朝”』『清朝とは何か』（別冊 環⑩）藤原書店、2009年。
- ③「清代マンジュ（満洲）人の「家」と国家——辞令書と系譜が語る秩序」加藤雄三=大西秀之=佐々木史郎編『東アジア内海世界の交流史 周縁地域における社会制度の形成』人文書院、2008年、105-130頁。
- ④「女直=満洲人の「くに」と「世界」——マンチュリアからみた「民族的世界」の姿」佐々木史郎=加藤雄三編『東アジアの民族的世界——近代以前における多文化的状況と相互認識』有志舎、2011年、147-177頁。
- ⑤「明代女真氏族から清代満洲旗人へ」菊池俊彦編『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会、2010年。

457-476頁。

- ⑥「大清帝国のマンチュリア統治と帝国統合の構造」左近幸村編『近代東北アジアの誕生——跨境史への試み』（スラブ・ユーラシア叢書4）北海道大学出版会，2008年，237-268頁。
 - ⑦「イリ地域をめぐる帝国の興亡と国境の誕生——ユーラシアの中心から辺境へ」窪田順平監修・承志編『国境の出現』（ユーラシア環境史第2巻）臨川書店，2012年，6-59頁。
 - ⑧「大清帝国と江戸幕府——東アジアの二つの新興軍事政権」懐徳堂記念会編『世界史を書き直す 日本史を書き直す——阪大史学の挑戦』（懐徳堂ライブラリー8）和泉書院，2008年，147-189頁。
- ※新・歴史群像シリーズ『大清帝国』学習研究社，2008年（杉山執筆部分）

【質疑応答】

加藤雄三：時間の関係もありますので，コメントするというより，質問をしていった方がよいと思います。まず私の方から，幾つかお尋ね致します。今回，中央ユーラシア帝国としての大清グルン，大清帝国ということでお話を頂きました。その中でもとりわけ重要なのは，後半の方でお話になった，側近政治・奏摺政治，とりわけ奏摺政治の側面であろうかと思えます。私が気になりましたのは，この側近政治という性格が漢人に対しても適用されたのかどうか，ということです。例えば三藩は側近の中に含めてよいのかどうか。それから，清末になって，非常に有力な総督や巡撫——曾國藩とか李鴻章とか——が出てきますが，彼らは（地方が力を持ち始めた）清末という時代だからこそ出てきたのかどうか，彼らは側近であり得たのかどうか。これが1点。それから，八旗そのものについてですが，今回は皇帝の周りに編成された八旗のお話を頂いたわけですが，そうすると駐防八旗の位置づけはどのようなのか，ということが気になりました——おそらく本日のお話では敢えて言及されなかったのだと思いますが。彼らはどういうかたちで編成されて，どのような指揮系統を持っていたのか。これが2点目です。とりあえずこの2点をお伺い致します。

杉山：ありがとうございます。まず側近政治についてですが，説明が舌足らずですみませんでした。これは非常に大きな話で，実証レベルではなく，私の考えということなのですが，「側近政治」というのは概括的な表現のつもりであって，当人が実際に皇帝の身辺にいて，皇帝から信任されて政治を動かしている，というような文字通りの意味ではなく，「側近政治」と呼ぶべきメカニズムで動いている，ということを実証したかった次第です。具体的にどうということかと申しますと，例えば，「内閣大学士や六部の尚書が最高位の大臣であり，まず彼らと政務が協議される」などといった制度的な規定があって，それで動いているのではなく，それをも選択肢の一つとしながらも，何よりもまず皇帝の非常に大きな裁量権を前提として，その裁量によって運営される体制である，と考えています。その際，皇帝は当然，自分の見知っている範囲や能力を把握している範囲を基準として登用します。働きぶりを以前から

知っているとか、奏摺のやりとりを通して知っているとか、チベット仏教を一緒に習ったとか、条件はいろいろあります。先ほど、血縁的あるいは時間的にヨリ近い者が登用されるという原則を申しましたが、近ければ常に上位に置かれるかという点、そうとも限りません。血縁的にヨリ近い兄弟・従兄弟はたくさんいるけれども、それよりもずっと遠縁の王公の方の信頼が厚い、などということは当然あります。重要なのは、皇帝が「これは」と見込んだ者を個別に集めて、ワーキンググループやタスクフォースをつくり、それによって一番コアな部分を動かしているという点で、そのような政治のあり方を、皇帝がピックアップした者はつまるところ側近であるので、「側近政治」と表現したのです。

例えば、軍機処が最高機関になったという説明は高校の教科書にも出てくるのですが、実は「機関」とはとてとも言えません。あれはまさしくタスクフォースであって、「六部の尚書なら必ず入る」とか「内閣大学士は必ず入る」などということは規定されていませんし、そもそも専任ポストも置かれていません。内閣とか軍機処とかいう制度的な面から見たのでは、こういう政治のあり方をうまく表現できないと思ったので、より包括的に、「側近政治」と呼んでみたのです。有名な軍機処だけでなく、軍機処ができる前の段階では、一部の大臣を内廷に召し出して南書房に詰めさせていますし、軍機処の創設にかかわらず、側近の統括役として御前大臣が別におり、こちらも定員もなければ規定もありませんでした。つまり、政治運営の核心には皇帝の信任を受けて召し出された者が参与する、ということが前提になっており、通常の政府組織は、ルーティンワークの執行と、タスクフォースを組織するための人材プールの役割を果たしたといえます。そのような体制を表現したくて、「側近政治」と申しました。

その意味では、漢人ももちろん側近政治の要員です。満洲旗人が主導的だった17世紀後半の康熙朝前半期すでに、側近が全て満洲大臣だったわけでも、漢人が完全に外朝勤務のみに制限されていたわけでもありません。李光地や熊賜履などがよく知られているように、科挙出身の漢人官僚をも、人によっては内廷まで召し出して行走させています。「漢人は一切だめ」などと制度的に線を引くのではなく、皇帝が「こいつは使える」と思えば科挙官僚でも側近に引っ張ってくる。満洲旗人でも「こいつはあかん」と思ったら、飾り物にはしてもタスクフォースには加えない。そこは皇帝の裁量権です。したがって、洋務運動期以降に漢人官僚の力が急伸するのも、地方の力量が上がってきたという中国史的な説明ももちろん当てはまっていますが、それが許容されるのは、「あいつは使える」と思う人材を引き立てることがもともとできたからだと思います——もちろん清末には、それは皇帝自身ではなく、実権を握っている西太后らが行なうことになりましたが。ご質問にあった三藩は、八旗制国家の文脈でいえば、いわば九番目、十番目の旗として位置づけられた特殊な軍団・王位に起源するものなのですが、しかし藩王の子弟に対しては近侍させたり降嫁させたりしており、最後にはそれ

が牙を剥くことになったとはいえ、やはり「近さ」の大きい存在だったと思います。

「側近政治」の根底にあるものとして、「功」——マンジュ語ではグングングといいますが——という考え方があります。モンゴル帝国においても、「根脚」といってモンゴル宮廷との縁故・寄与の大小を表す概念がありますが、それとよく似て、清においても、近しさとともに「功」の大小がしばしば評価の基準になっています。服属したのは遅くなってからだけれども、抜群の功がある者であれば、譜代の臣下より上位に行くこともあります。逆に、家柄はとてもしばしば役立たないので冷や飯を食う者もいます。つまりは、「功」と「近さ」とのバランスです。「功」が大きく、かつ「近さ」も近い者こそが側近です。私の説明が舌足らずでしたが、このように考えれば、軍機処設置以前も、軍機処が機能しなくなって以後も、一貫して説明できるのではないかと思っております。

それから、駐防八旗のことは話が複雑になるので本日は省略してしまい、失礼しました。駐防八旗はあくまで八旗の一部ですので、実は先ほどの資料⑧の図の中におさまっております。八旗各旗の本体から出向した将兵が集まって、それぞれの駐防八旗を構成するのです。すなわち、広州駐防であろうが西安駐防であろうが福州水師であろうが、これら駐防八旗の部隊は、全て北京の禁旅八旗から出向した将兵で組織されており、現地における指揮官である駐防將軍も、同様に出向で任命されます。ですので、10か所に八旗が駐留していたら「八十旗制」になるかということ、そうではありません。たとえ広州にしようが新疆のイリにしようが、例えば鑲藍旗満洲の中隊長であれば、勤務地に関わりなく「私は鑲藍旗の所属です。主人は北京におられる鄭親王殿下です」などということになります。ただし、戦闘や訓練においては、それぞれの現地の指揮官の指揮に従います。譬えて言うと、文学部から2人、法学部から2人、などと各学部から委員が集まって一つの全学委員会を作る、その委員長は今年には経済学部だったけれども来年は工学部が受け持つ、といったようなもので、その委員会が駐防八旗であり、委員長が駐防將軍というわけです。先の譬えて言うならば、1組から8組までのクラスからそれぞれ2人ずつ出て美化委員会を構成し、たまたま今年は3組選出の生徒が美化委員長をやっている、というような感じです。だから、駐防八旗という自己完結的な組織が独立してあるわけではないのです。非常に巧妙に組み立てられた組織ですね。そのため、駐防八旗が反乱を起すということも、ついにありませんでした。三藩の乱のようなものは一切なく、せいぜい給料が安いということで暴動が起った程度(笑)、つまり兵変ぐらいでした。

付け加えておきますと、高校の世界史でも出てくる綠營は、それに対して漢人の軍隊ですから、無頼の漢人に給料を払って雇っているようなものなので、あまり期待されていません。しかも、一部の例外を除いて、派出所のように、1箇所に数人くらいに分割して配置していました。しかし駐防八旗の方は、拠点に数千から1万数千くらいの兵力をまとめて置いてい

て、多少の規模の反乱には単独で対処できる能力を持っています。緑営は警察組織として分散させているのに対して、駐防八旗は拠点防衛をする、というように役割を分けていました。これが駐防八旗です。

加藤：ありがとうございます。それからもう1点。用語の問題なのですが、ご報告の中で「巡礼圏」という言葉が出てきます。この言葉の意味について、もう少しご説明頂けますか。

杉山：「巡礼圏」は、ベネディクト=アンダーソンが『想像の共同体』で使っている用語です。官僚なり公務員なりが、そのキャリアにおいてどの範囲に赴任するか、そのエリアのことを、アンダーソンは比喩的に「巡礼圏」と呼んでいます（アンダーソン（白石隆=白石さや訳）『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』書籍工房早山、2007年、第Ⅶ章）。「巡礼」を重ねる中で、その官僚・公務員のキャリアが上がっていくわけですが、大清帝国においては、旗人官僚の「巡礼圏」は帝国全域に及ぶ。それに対して、漢人科学官僚が赴任できる範囲（巡礼圏）は原則として漢地に限定される——こういうことです。

市原慎太郎：明治大学大学院の市原と申します。自分はもともと1640～1740年くらいまでの、雲南・貴州など西南地域において、少数民族が漢民族にどうやって同化され、或いは圧倒されていったのか、という問題を研究しております。1720年頃、雍正帝の時代に、少数民族をコントロールするためのオルタイ（Ortai 鄂爾泰）という人物が派遣されてきます。どの旗の所属だったか、ちょっと忘れてしまいましたが……。

杉山：鑲藍旗に所属するシリン=ギョロ（Sirin Gioro 西林覺羅）氏の有名な大臣ですね。

市原：その彼がかなり広大な範囲を支配することを確約された前後の過程が、お話を伺っていて、見易くなったように感じました。それまで漢人の官僚、儒教的な官僚たちに任せていたのから、雍正帝の側近であるオルタイに支配を委ねることにし、奏摺によって極めて綿密にレポートを出させることによってコントロールすることが可能になった、ということが雍正帝の支配の特徴なのかなと思っておりましたが、本日のご報告をお聴きして、近しい者から派遣して行って、大きな権力を渡していくという新しい観点を提供して頂くことで、その過程がとても分かり易くなったように感じました。質問というよりは感想ですが。

廣瀬直記：専修大学で中国語の兼任講師を勤めております廣瀬と申します。専門は中国中世の宗教思想なので、全くの門外漢なのですが、そのような立場からちょっとお尋ねしたいと存じます。清を宋一元一明一清と続く中華帝国として見るのではなく中央ユーラシアの帝国として見る視点はとても新鮮で、目から鱗が落ちる思いでした。その観点からしますと、例えば唐王朝も非常に広い版図を持ち、同じように漢民族以外の民族との関わりのある大きな王朝であったと思われませんが、杉山先生が本日、清朝についてご報告下さった視点というのは、それ以外或いはそれ以前についても当てはめることが出来るのかどうか、ということをお伺いしたいと思います。

杉山：私はもともと、ウイグルや突厥が専門の森安孝夫教授の下で学びましたので、唐と突厥・ウイグルについての議論の影響も受けております。私の認識では、北朝隋唐史でも、中央ユーラシアの性格をめぐる議論が現在非常に盛んになっていると思います。従来の均田制・租庸調制・府兵制の律令体制理解が塗り替えられつつあり、森安教授や杉山正明教授は、北朝起源の「拓跋国家」という捉え方を強調されています——もちろん反論もありますが——。それらを見る限り、北朝から始まって唐前半期の国家は、極めて中央ユーラシアの性格が濃いと思われ、個々の要素こそそれぞれ違いますけれども、骨格としては、清朝の場合と共通するところが多くあるように感じています。すなわち、軍事力を掌握する集団が意思決定権を握っており、彼らは漢人の正統性のロジックに必ずしも従わない。主従関係、家族構造、親族組織などについては独自の慣習やまとまりを維持している。漢人向けに漢文で何か主張する場合には、清朝の皇帝と同様、正統派の漢文で作文しようとしませんが、中味がそれで動いているかという点、実はそうではありません。中央ユーラシア史の立場からの北朝隋唐史の見直しは、このように現在進んでいるところで、私も唐代史の方と共同研究をしておりますが、非常に通じるところがあると思っています。

とりわけ刷新が進んでいるのは軍制面、すなわち府兵制です。従来は、戸籍に登録された農民の徴兵軍隊であったとされてきましたが、近年の研究では、実戦部隊の大半は、役人としての長官と徴兵された兵隊ではなく、指揮官は一見、唐の正式な職官を帯び、漢人官僚のような名を称しているものの、実は例えば突厥の〇〇部族の〇〇氏の首長が漢名を名乗り、官称を授けられただけであり、また麾下の軍隊も、もともと突厥などの服属遊牧集団が組織名を与えられただけで、軍隊内では首長と領民の関係がそのまま維持されており、出陣時はそれが実戦軍の主力を構成していた、といったことが明らかになってきています。従前の部族長と部族集団、日本に置き換えていけば大名とその家中のような関係が、律令制下の官職名などを被せられただけで、その下で存続しており、しかもそちらの方が実体だということです。一定の枠組みにはめながら、しかも在来の関係と活力を生かす、このような方策を極限まで整頓した形態が八旗なのですが、同種のことは、このようにそれ以前の諸王朝に遡ってもあったといえると思います。

モンゴル帝国は、もっとよく当てはまります。それまでの遊牧国家では、在来の部族長率いる部族国家が連合しただけだったのですが、モンゴル帝国では、千人という供出兵員数によって規準化した千人隊制（千戸制）をしいて、在来集団を千戸単位に再編しました。巨大な集団ももはやそのままではなく、複数の千人隊に分割された上で、従前の首長家に複数の千人隊を委ねる形になったのです。これは、一面では従来の首長—属民の関係が維持されていますが、他面では千戸単位に再編成されたともいえます。私が今日お話しした八旗制でも、ヌルハチのライバルだった勢力は、服従すると本領を安堵されますが、モンゴルの千人隊と

同様に、それが大きな勢力であれば複数のニルに分割されます。巨大なままでの存続は許されず、複数のニルに分割されるのですが、そのニルの長は、旧首長の子孫が代々任じられることが一般的でした。これは既得権益の保証といえれば保証ですし、他方、一定の基準を当てはめて再編成したともいえ、モンゴルと揆を一にしています。また、外様大名に相当するものがいなくなっていくのもモンゴル帝国以降の特徴です。モンゴル帝国、ティムール帝国、ムガル帝国、大清帝国、いずれもそうです。このような見方で整理していったら、その中で、時代による展開をたどるといえることが、重要なのではないのでしょうか。

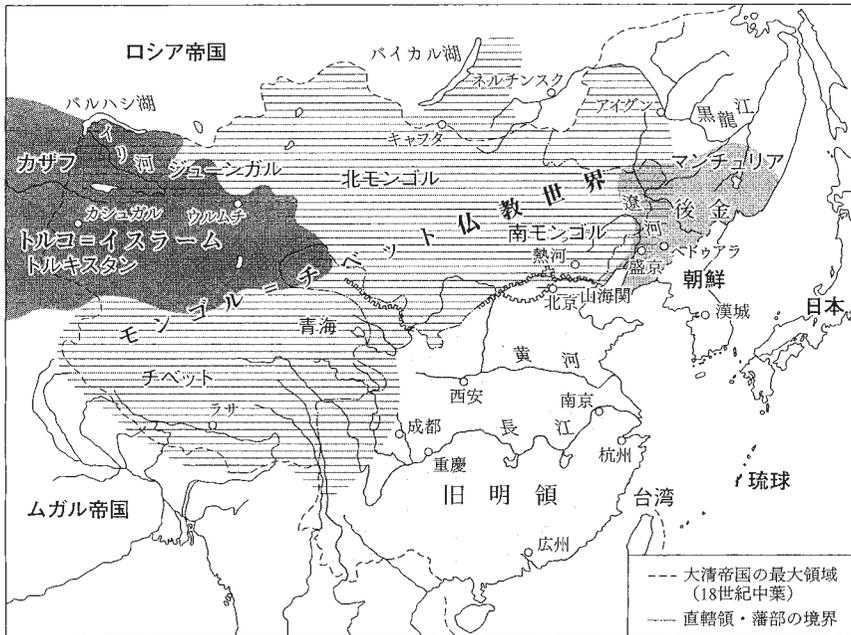
前川：大変貴重なお話を有難うございました。圧倒的少数であるマンジュ人が何故に圧倒的に多数である漢人と多様な諸民族とをかくも長期に亘ってかくも安定的に統治することが出来たのか、これこそマーク=エリオットのいう「満洲人の奇跡」ですが(エリオット(楠木賢道編訳)「清代満洲人のアイデンティティと中国統治」『清朝とは何か』(別冊 環⑩)藤原書店、2009年、109-110頁)、その「奇跡」の謎を解く手がかりを、今回のお話で得ることが出来たように感じた次第です。そのうえで、杉山先生の今回のご報告の本筋とは少し違いますが、最後に言及された辛亥革命のことについてだけ、ちょっとお伺いしたいと思います。帝国から国民国家へという道筋そのものに不賛成ではないのですけれども、例えば古くは神聖ローマ帝国、それからオスマン帝国、新しくはソヴィエトなど、古今東西を問わず帝国が解体する際には、いわば星雲化とでもいうべき現象が起こり、帝国の各部分が雨後の筍のように独立していきますよね。それに対して、中見立夫先生も指摘されておりますように(中見「モンゴルの独立と国際関係」『アジアから考える』3『周縁からの歴史』東京大学出版会、1994年、80-81頁、他)、大清帝国の解体の際には、もちろん紆余曲折はあるものの、結局、清の版図を基本的に継承する民国から離脱したのは、先ほどお話のあったボグド=ハーンのモンゴル(外蒙古)だけであって、チベットにしてもウイグルにしても完全には離れていかないわけで、他の帝国の場合のような星雲化が起らなかった、というところの方がむしろ注目されるようにも思うのですが、この点はいかがでしょう。「中国」が国民国家になっていくというのがどういうことなのか、果して民国(それから人民共和国)は国民国家になったのか、それとも帝国の再編だったのか、或いはその重畳だったのか、ということとも関わる問題かも知れないのですが。

杉山：モンゴル・チベットなど、帝国を構成する大ブロックの統合の論理と離脱をめぐる考え方については、先ほど大枠はお話ししましたが、帝国の再編／解体という点でももう少し細かいことを言えば、漢地では、辛亥革命の時に各省がいったん独立を宣言していますので、形式的には独立、星雲化の様相を見せたということもできるかと思います。内陸方面でもそのような動きがなかったわけではありませんが、星雲化、細分化には行かず、モンゴルはモンゴル、チベットはチベットとして分離の道を探ったといえます。例えばオーストリア=ハンガリー帝国のように、異なる言語や信仰でまとまっている人たちが似たような力量を持つ

て拮抗し、しかもそれが入れ子構造になっているという状態ではありませんでした。

資料⑩に載せておきました、一般的な直轄領／藩部というのとはちょっと違う地図を見ていただきますと、モンゴル=チベット仏教世界という点ではモンゴルもチベットも一かたまりなのですが、これは広大すぎるので、文字や言語のレベルでのモンゴルというかたまり、チベットというかたまりが大きな意味をもち、それを単位として自立を宣言することになりました。ただ、内モンゴルの王公たちが自立を選ばなかったことは、分裂した行動といえると思います。いずれにせよ、極端に星雲化が昂進しなかった背景には、清代の300年間にチベット仏教が浸透して、君主権・統治権の考え方が変化したということがあると思います。また、清治下で設定された統治の枠組みがモンゴルにも浸透しているので、〇〇ハーンといったものが何人も乱立するのではなく、ボグド=ハーン1人を立てて大清皇帝の代りをしてもらうことになった、ということもあると思います。

資料⑩



チベットでは、17世紀以降ダライ=ラマの権威が優越していましたが、ダライ=ラマは世俗のことには関わらないので、大清皇帝が俗界のパートナーとなっており、その退位に伴い、ダライ=ラマ政権が独立を宣言します。国際的に正式に認められていなかっただけで、ひとたびは自立の道を歩んでいるのです。それを言うのであれば、モンゴル国も第二次世界大戦が終わるまでは立場は似通っており、中華民国は、それまで一貫してダライ=ラマ政権に対

しても、ボグド=ハーン政権に対しても独立を認めず、これに対し両政権は相互承認を行なっていました。中華民国がモンゴル人民共和国の独立を承認するのは大戦後で、ソ連のバックアップのもとでの1945年の独立についての国民投票の結果を受けて、ついに蒋介石政権も承認したのです。

ウイグルの場合は、これらと状況が異なります。ここはそもそも、どのような範囲で、何を以て独立するのかということ自体が問題だったのです。ウイグルというのは1920~30年代にようやく出てくるまとまりで、それまでは「お前は何人か」と聞かれたら、オアシスは「陸上の島」といわれるように孤立性が強いからです、「私はカシュガル人だ」「私はヤルカンド人だ」というようにオアシス単位で答えるほどでした。洋務運動期に左宗棠が入ってきて漢人による統治が始まったことを契機として、後からまとまりが生まれてきたのですが、ダライ=ラマやボグド=ハーンのような求心核はありませんでした。しかし、漢人主導の支配に対して「それはおかしい」という感覚をもっていたのは、モンゴル・チベットと共通しているといえると思います。

私は、全体としてこのように説明できるのではないかと考えております。この点、より精緻な説明をするのに、有効な質問をいただきました。ありがとうございます。

前川：ありがとうございました。ユーラシア史の一環としての「満洲史」と中国史の一環としての「清朝史」とは、私のような外野から見ると、なかなか連続しないばかりか、反目しているのではないかと感じるころもありましたが、本日のお話をお聞きして、両者を連続する視野も開けてくるように感じました。また、中世—近世、それから近代の間の連続と断絶という問題についても、多くの示唆を得られたように感じました。まだまだお話をお聞きしたいところなのですが、杉山先生はこの後、東洋文庫でご用事があるとのことですので。お忙しい中、お出で頂き、貴重なお話を頂けたことに改めて感謝申し上げます。この辺で本日のワークショップを閉めたいと存じます。杉山先生、本日はありがとうございました(拍手)。